

第一回梅原猛フォーラム

「梅原猛を継ぐ～『人類哲学』とは何か」

<全発言録> 20251111更新

司会

ただいまより第1回梅原猛フォーラム「梅原猛を継ぐ…『人類哲学』とは何か」を開会いたします。

本日はこの会場とオンライン同時配信、合わせて300名以上の方々にご参加をいただいております。私は財団事務局の和泉と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、今年は故梅原猛の生誕100年です。これを機に、梅原猛が遺した梅原記念財団が活動をスタートいたしました。

今年3月20日の梅原猛の誕生日に、特別催事として、生誕100年記念フォーラム「これからの梅原猛」を開き、そして先般、基軸事業である「梅原猛人類哲学賞」の創設を発表しました。目下、その選考が進んでおり、記念すべき第1回の発表は来年の1月、授賞式は3月を予定しております。どうぞご期待くださいませ。

そしてこの賞に連携した形で、本日のフォーラムは企画されました。そのテーマは「梅原猛を継ぐ…『人類哲学』とは何か」というもので、梅原哲学の「はじまり」と「これから」をめぐって、多くの方々に議論いただこうという旨であります。

それでは、開会に先立ちまして、一般財団法人梅原記念財団代表理事・梅原賢一郎より一言ごあいさつ申し上げます。

■ご挨拶 梅原賢一郎

梅原記念財団は、「梅原猛とは何であったのか」という問いとともに始まります。

ある高名なフランス文学者は、「梅原猛はロマン主義の哲学者」といいました。思い定めた対象を、憧憬と情熱をもって、追いかけるさまは、ロマン主義の哲学者というにふさわしいかもしれせん。

ところで、ロマン主義といえば、その先駆けとなった合い言葉、「疾風怒濤」という言葉を思いだします。梅原猛は、つむじ風となって、さまざまな領域を、吹き荒し、砂埃を立て、駆け抜けた。そして、そのあとには、批判の嵐も逆巻いている。風雲児といえば聞こえはいいですが、一見、お騒がせな人物であったようにも思われます。

ただ、梅原猛が、風であったとしても、一過性の、世間を騒がせただけの、センセーショナル

な季節風にすぎなかったとしたら、梅原記念財団は設立されていなかったと思います。梅原猛は、たんに、破壊の風でも、虚無の風でもありませんでした。

話は妙なところに飛ぶかもしれませんが、宮沢賢治の『風の又三郎』において、「又三郎」は、「変てこな鼠いろのだぶだぶの上着」を着て、登場します。又三郎の父も、「白いだぶだぶの麻服」を着て、登場します。

そう、そのように、梅原猛は、風であったにしても、それなりの格好がありました。それなりの体裁がありました。それなりのエチカがありました。もっといえば、それなりの論理がありました。

そして、その論理は、けっして、ヨーロッパ的なロゴスの論理ではなかったと思われます。それは、進歩や発展よりも、循環や回帰を主張することからすれば、梅原猛の恩師、『ロゴスとレンマ』の著者、山内得立の言葉をつかっていえば、ロゴス的な論理ではなく、レンマ的な論理ということができるかもしれません。

とまれ、目にとどめおくことのままならない、風の中に間に、見え隠れする、その論理を模索すること、そのことは、たいへん興味深いことであると同時に、今日のさまざまな問題を考える上で、たいへん重要なことであると思います。

梅原記念財団設立の動機も、もちろん、そこにあります。

しかし、梅原猛が、「だぶだぶの上着」を羽織り、「半ズボン」を履いた、風であったにしても、梅原記念財団は、いまだ、設立されていなかったかもしれません。設立されていたにしても、このように、みなさまのまえで、活動をしていなかったかもしれません。

そう、もうひとつの動機があります。よりパーソナルな動機です。ただ、それについて、ここで、じゅうぶんにお話することはできません。ひとこといえば、梅原猛の死は立派な死であったということです。

2019年1月12日、梅原猛は、東山の麓、若王子の自宅で息をひきとりました。93歳でした。子や孫に囲まれての大往生でした。

梅原猛は、生前、ソクラテスやイエスやシャカの死について思索しました。死は、その人の思想や哲学を象徴するともいいました。その意味で、梅原猛は、死において、見事に、梅原哲学を演じきったということができます。いや、演じきったというよりも、なりきったということができます。

それは、わたしたち家族にとって、ありあまる贈与のような死でした。そして、とくにわたしにとって、ややもすれば父と子とのあいだにあったであろう軋轢や葛藤も、一挙に吹っ飛んでしまうような死でした。

わたしは、その死を目撃し、財団の活動をすることに、なんの迷いも躊躇いもなくなったのです。

きょう、若王子の家を出るとき、庭の木々が雨のなか風に揺れていました。ふと、宮沢賢治の『いちょうの実』のなかの、「いちょうの実」を運ぶ風のことを思いました。

また、風は、古代ギリシャ語で、プネウマといいます。プネウマは、息でもあり、命でもあり、霊でもあります。わたしは父がそこにいるように思い、その思いをひっさげて、ここにまいりました。

とまれ、かくも大勢の人たちにお集まりいただき、立派な会場で、第一回「梅原猛フォーラム」が開催できましたこと、基調講演をお引き受けいただきました、日下部吉信先生をはじめ、ご協力いただきましたみなさまに、こころより、感謝を申し上げ、わたしの挨拶とさせていただきます。

司会

それでは第1部を始めます。まずはしんめいPさん、演台へどうぞ。しんめいPさんは今年37歳。本日最若手の講師です。

仕事がかまくらに引きこもり状態の中で東洋哲学と出会い、貪るように本を読み、そして1冊の本を書き上げました。この本が、20万部を超える大ベストセラーとしていまも売れ続けております。そのタイトルは『自分とか、ないから。——教養としての東洋哲学』（サンクチュアリ出版）。本日は「梅原仏教学と私」と題してスピーチをいただきます。それではよろしくお願いします。

■スピーチ「梅原仏教学と私」 しんめいP

ご紹介をありがとうございます。よろしくお願いします。

ただいまご紹介にあずかりました、しんめいPです。ちょっとけったいな名前で恐縮なんですけれども、「しんめいP」という名前で、「しんめい」が私の名字なんですけれども、本名でやるとちょっと恥ずかしいなと思って、このような名前でさせていただいております。

ご紹介にあずかったんですけれども、『自分とか、ないから。』という本を去年の4月に、初めての本なんですけれども出版させていただきました。今回なぜ私がここにいるかというと、こちらに大変小さい字で恐縮なんですけど、この5月にお亡くなりになった、京都大学の名誉教授でいらっしゃる鎌田東二先生にこの本のご監修をいただきました。鎌田先生の生前に梅原記念財団が始動していく中で、君にも何かできることがあるかもしれないよ、ということでおつなぎいただいたんです。そういったご縁で、今回お話しさせていただく内容が、「梅原仏教学と私」ということでございます。

最初にお話しいただいたとき、「初めての梅原猛」というお題を仮で渡されたんですけど、それはお断りしまして……。というのは、それはもう大変高名な学者さんが、あえて入門のみなさまに語るような内容の切り口になりそうだなというふうに思ったので、私は学者でもないので、私にできることといえば、私が特に『自分とか、ないから。』という本を書くに当たって梅原猛先生の著作からどういうことを学んできたのか、ということだけが私が語れる範疇かなと思いました。領域も仏教学に限定させていただく形でお話しさせていただこうと思っておりますので、よろしくお願いします。

なので、この本と梅原猛先生の関係というところを軸に、今日、お話を進めさせていただくことを許していただければと思うんです。

東洋哲学をどう受け取ったか

この本ですが、私は僧侶でも学者でもない中で、東洋哲学っていうものをみなさまに、およそ同年代の方を中心にというイメージではあったんですけども、おそらく東洋哲学になじみのない同年代のみなさま中心に、どうやったら受け取ってもらえるかなということも、あるいは、私がそんな本を出していいのか？という問いも踏まえて考えたときに、エッセイという形で、今回の発表も同じですけども、私が東洋哲学をどういうふうに個人的に受け取ったのかということにフォーカスして書かせていただいたものでございます。

この本の参考文献にも、実は梅原猛先生の本をたくさん挙げさせていただいたというご縁がありまして、大きな影響をいただいたのはこういった部分だったのかということから話を進めさせてください。

ベースは梅原猛の「仏教の思想」シリーズ

まず1つ目は、本の構成についてなんです。まず私の本の構成が、全部で6章あるんですけども、1章にお釈迦様（ブッダ）、2章にナーガールジュナ（竜樹）、3章に老荘思想、4章に達磨大師、5章に親鸞、6章に空海、こういった形でそれぞれの方の思想を紹介していくという形なんです。ざっくり言いますと、これは日本に仏教が伝わった順番ですね。インド、中国、日本。この大きな構成で捉えさせていただいてまして、ベースにさせていただいたのが、梅原猛先生が大きなプロジェクトとして編集された「仏教の思想」シリーズです。本書を執筆させていただく中で、これを何度も何度も繰り返し関連箇所を読ませていただいた。ほんとうにこの知のアーカイブを残していただいたおかげで、私はこの本を書かせていただけたなと。こんな私が印税をこんな受け取っていいのかなと思うぐらい、ベースになっているのが梅原先生のご編集されたものですけども。12冊あって、4冊ずつがインド、中国、日本に対応しているんです。私はほんとうに実績も何もない人間なので、構成ぐらいはけっこう骨太な構成を使わせていただきたと思って、このような形にさせていただきました。

とはいえ、それだけだと私が本を出す意味もあまりなくなってしまうので、少しだけ工夫を加えた部分が最後の日本の章で、親鸞、空海という2人を挙げさせていただいているんですけども、これは順番が、親鸞が13世紀の人で、空海が9世紀の人なので、実は空海のほうのはるかに古い方なんですけど、あえて最終章に大トリ、そして本書の結論部分である部分を言い当てるような、「欲を肯定する」という部分が非常に重要だったんですが、空海を持ってきたのは、取りも直さず、やっぱり梅原猛先生が空海というものを、私の知る限りでは、日本の哲学史あるいは思想史上に大きく位置付け直されたというお仕事に大変感銘を受けて、私自身もそれに非常に共鳴するものをもったので、空海の章を最後にしました。

ベースは梅原猛の「仏教の思想」シリーズ

まず1つ目は、本の構成についてなんです。まず私の本の構成が、全部で6章あるんですけども、1章にお釈迦様（ブッダ）、2章にナーガールジュナ（竜樹）、3章に老荘思想、4章に達磨大師、5章に親鸞、6章に空海、こういった形でそれぞれの方の思想を紹介していくとい

う形なんです。ざっくり言いますと、これは日本に仏教が伝わった順番ですね。インド、中国、日本。この大きな構成で捉えさせていただいてまして、ベースにさせていただいたのが、梅原猛先生が大きなプロジェクトとして編集された「仏教の思想」シリーズです。本書を執筆させていただく中で、これを何度も何度も繰り返し関連箇所を読ませていただいた。ほんとうにこの知のアーカイブを残していただいたおかげで、私はこの本を書かせていただけたなと。こんな私が印税をこんな受け取っていいのかなと思うぐらい、ベースになっているのが梅原先生のご編集されたものですけども。12冊あって、4冊ずつがインド、中国、日本に対応しているんです。私はほんとうに実績も何もない人間なので、構成ぐらいはけっこう骨太な構成を使わせていただきたいと思って、このような形にさせていただきました。

とはいえ、それだけだと私が本を出す意味もあまりなくなってしまうので、少しだけ工夫を加えた部分が最後の日本の章で、親鸞、空海という2人を挙げさせていただいているんですけども、これは順番が、親鸞が13世紀の人で、空海が9世紀の人なので、実は空海のほうはるかに古い方なんですけど、あえて最終章に大トリ、そして本書の結論部分である部分を言い当てるような、「欲を肯定する」という部分が非常に重要だったんですが、空海を持ってきたのは、取りも直さず、やっぱり梅原猛先生が空海というものを、私の知る限りでは、日本の哲学史あるいは思想史上に大きく位置付け直されたというお仕事に大変感銘を受けて、私自身もそれに非常に共鳴するものをもったので、空海の章を最後にしました。

梅原の影響

みなさんお詳しいと思うので、前提知識なしで申し上げてしまうんですが、空海を最後にしないとけっこう問題がありまして、私も本を初めて出して、自分も本を出せて嬉しいなみたいな、ちょっと承認欲求にまみれたところがあるんですけども、仏教の本です、っていうふうにしてしまうと、著者が煩惱から離れてないっていうことに対する一抹の違和感みたいなものがどうしても出てしまうかと思うんです。空海を最終章に持ってくることで、そういう煩惱にまみれた自分の欲っていうものも、本当に大げさなことを言うと、全命のために自分はこの自分の命を、欲を通じて使っていくんですという申し立ても立つかなという部分もあって、最終章にさせていただいているのは、梅原先生の影響によるものだと私は勝手に思っております。

そしてもうひとつ、これはちょっとしたことなんですけど、大きな影響がいくつかありまして、これは表現の部分でも実はかなり参考にさせていただいているところがあります。自分で言うのもなんですけど、私の本の特徴というのが、それぞれの偉人の方々を、できるだけ身近に受け取ってもらおうということで、現代風にいじるような書き方もさせていただいています。

例えば悪人正機の思想ですね。悪人こそ救われるんだというような、浄土宗、浄土真宗の教えで、親鸞と法然を対比する場面で、その法然さんと親鸞さんは基本的には悪人正機というところでは非常に通ずるものが当然あったんですけども、法然さんは、顔立ちというか、出で立ちが聖人すぎると。一方で、親鸞さんというのは非常に庶民的な顔つきなんだと。だからダメな奴ほど救われるみたいな、悪人正機が説得力があるのはやっぱり親鸞さんなんだみたいな話をさせていただいているんです。こういった部分がすごくたくさんあるんですが、梅原猛先生の著

作に同様の記述が実はありまして、梅原猛先生がこういうふうにおっしゃっているのなら、僕もこういうふうに言ってもいいかなということで書かせていただいているというところがあります。

梅原猛の姿勢

3点目です。これが最大のものですけれども、「姿勢」の部分です。向き合い方といいますか、本というよりも何か仏教的なものを自分の中で深め、それをみなさまに広げていくっていうなかで非常に大きい影響をいただいていると思うのは「姿勢」で、具体的に引用を3つさせていただきます。

これはクイズなんですけど、今から3つの梅原猛先生の引用をさせていただくので、その共通点は何かというクイズです。全部「仏教の思想」シリーズから取っています。

「私はしばしば密教経典を読みながら、ツァラトウストラの一節を読む思いがした」

「私は数年前に観無量寿経を読んだときの感動を思い出す」

「私は親鸞や日蓮に多くの親近感を感じてきた。しかし、道元は一体どのようにして笑い、どのようにして怒り、どのようにして泣くのか」

はい、どうでしょう？ 共通点。何となくおわかりになっている方もいらっしゃるのではないかなと思うんですけれども、非常に単純です。「私は」から始まる記述が大変多いんですね、梅原猛先生は。

私にはアカデミアのことはまったくわからないので、これが意味するところというのは知る由もないんですけれども、一般人の読者の一人として、ご自身が親鸞、空海、道元、日蓮も含めて、こういった祖師の方に対して、自分自身がどういう影響を受けて、どういうふうに感動し、何を学んできたのかっていうことが、梅原猛先生の本ではありありと感じられる。ということで、私のなかで梅原猛先生の姿勢の部分と言ったときに、言葉にするとややこしいんですけど、梅原猛先生自身が、仏教ワールドというか、東洋哲学のワールドのちゃんと中の人物であるような書き口でいらっしゃるということに、私は大変深い共鳴を覚えたことが大きかったです。

素人が図式化してみるんですけれども、通常、仏教の本を一読者として読んでいるときに、やや違和感があるときがあると思っていて、それは、例えば仏法のような真理、例えば悟りの世界であったり、空であったり、無我であったり、そういった表現がされるころのものを、あたかもサイエンス、科学、科学者として書くときは、外の超越的視点から、それを知っています、把握できていますと。仏教って本当は不可知というか、言詮不及、不可思議、思議できない、わからないというところが到達点であるはずなのに、どこかわかっている前提で話が進んでいくというような違和感を、僭越ながらちょっと感じる 때가多かったんですけれども、梅原猛先生は、私は何となくそこを徹底されている感じがしたというか、それはあくまでやっぱり中の人間として、仏教の真理と呼ばれるものの中にいるということを忘れない、片足は必ずそこに置き続けていらっしゃるというところに大変共鳴を覚えたというのが記憶に残っております。

私は僧侶でも学者でもない。エッセイですというのは逃げの一手を打った部分はあるんです

けれども、私なりに仏教を語る、東洋哲学を語るっていうときのスタンスとして重要なのが、私自身というものがちゃんと中にいるということですね。

引き合いに出すのはちょっとアレですけども、そういう意味で、梅原猛先生と鈴木大拙先生と井筒利彦先生の本は、本を書く上ですごく読ませていただいたんですけど、梅原猛先生がほんとうに特徴的なのは、ご自身の苦悩というものをしっかり文章に書いてくださっている、ということが、私としても自分の問題を考える上で、非常に参考—というのはおこがましいですね—勉強になった部分でありました。ちょっと駆け足でいきます。

大我に通ずる

「私」というふうになったときに思い起こされるのが空海です。空海はやっぱり「曼荼羅の思想」だと思うんですけども、「私」でありつつも、「私」は大日如来でもあるというふうに、さまざまな私の非常に上位の存在であるものを、同時に自分を通じて顕現していくというような思想なのかなと思っているんですが、ちょっと大胆な解釈をお許しいただけるのであれば、例えば『水底の歌』だとか『隠された十字架』という仏教学以外のところも、どこか聖徳太子であったり、柿本人麻呂であったり、そういった方に憑依というか三密というか、そういった方々の中に、ご自身を投影されている以上のことをしている気が私はしています。やりすぎるとシャーマニクな感じになってしまって、学問の本分とはずれるかもしれないんですけども。

そういった「内的確信というものを通じて何かを語る」というリスクを取らなければ語れないことがやっぱり世の中にはあるはずで、そこに果敢に挑戦されて成果を上げられたのが梅原猛先生ではないかなと思っていて。つまり、学問上のルールというのを破っていく。よく飛躍というふうに、ご批判ももしかしたらあったかもしれないですけど、そこは慈悲というか、大我、より世界全体を、世界に対して貢献していこうという慈悲の精神があったゆえでの乗り越えなのかなというふうに私は解釈しております。そういったものが芸術につながっていて、スーパー歌舞伎などにもつながっていると思うんです。

これは『草木の生起する国』という、東浩紀さんとの対談の本での一節ですが、空海の言葉でいくと、世の中の人々は小欲で満足しているが、私は大欲を持っていると。大我に通ずることを、直接的にはおっしゃっております。

『人類哲学序説』に最終的に梅原猛先生が最晩年にいかれたというのも、非常に納得感というの—おこがましいですね—でも納得感があるというか。

私というものを「大我」に持っていくということを通じて、梅原猛先生は著作であり、表現活動であり、社会活動をされてきたのかなというふうに私としては思っております、そこに一読者として、非常に共鳴であり、憧れを覚えたところでありました。

以上、「私」という言葉に何重かの意味を持たせていただいたんですけども、「梅原仏教学と私」というテーマで語らせていただきました。

ありがとうございました。

司会

ありがとうございました。最若手のしんめいP君の次は、最長老の講師をお招きしております。日下部吉信先生です。どうぞ拍手でお迎えください。

若き梅原猛が初めて教壇に立ったのは立命館大学だったんですね。日下部先生はその若き梅原猛に師事をした、いわば最初のお弟子さんにあたられます。プラトン以前の初期ギリシャ哲学がご専門で、物事の深層といいますか、その裏側にあるもの、あるいは奥深くにあるものを追究された梅原猛先生に通じるものを感じます。

日下部先生が実際に接し、触れた「梅原哲学のはじまり」はどのようなものだったのか、それを含めて日下部先生の見る梅原哲学の全貌を語っていただきたいと思います。それではどうぞよろしくお願いいたします。

■記念講演「はじまりの梅原猛」日下部吉信

ただいまご紹介にあずかりました日下部でございます。このような場において梅原哲学について語る機会を与えていただいた梅原猛記念財団に感謝申し上げます。そして梅原哲学について語るということですが、梅原哲学って実は大きい哲学でございまして、これを口頭で語り通すということはちょっと私にも難しいと思って、それで申し訳ありませんが、ペーパーを用意させていただきました。いまお手元に届いているかと思いますが、「哲学者梅原猛——縄文と森の思想」というこのペーパーを読む形で講演させていただきたいと思います。しかし、あくまでも時間内におさめないといけませんので、少し早口になるかと思いますが、お許しいただきたいと思います。

このペーパーは、前半は梅原猛の哲学の軌跡を追っていき、そしてその上で梅原哲学の存在史的意味は何かということを見極めたいというような趣旨でございまして。ハイデガー的な言い方で言いますと、存在史的な意味、梅原哲学の存在史的意味ですね、これを見極めたいというような趣旨でございまして。

◎哲学者梅原猛——縄文と森の思想——

クサカベクレス

§はじめに

ここに一冊の書物があります。『美と宗教の発見』（筑摩書房、昭和42年）、梅原猛の最初の著作であります。共著としてはそれ以前に望月信成氏、佐和隆研氏らと共に著わされた『仏像——かたちと心』（NHK出版、1965年）がありますが、単著として公刊された書としては『美と宗教の発見』が梅原猛の最初の著作であります。梅原はこの後300冊をはるかに越える著作をものすることになりますが、本書がその生涯にわたる旺盛な著術活動の出発点となった著作といえることができます。

この書がはじめて筑摩書房から刊行された昭和42年〔1967年〕当時、わたしは学生のひとりとして梅原猛に日常的に接しうる立場にありましたが、今でもこの著作、ならびにこれについて公刊された『地獄の思想』（中公新書、1967年）を手にするとき、梅原猛のまわりに醸し出されていたあの頃の一つ異様な哲学的雰囲気（霧）が蘇ってきて、狂おしい想いに苛まれるのであります。強いパトスを秘めたこれらの二著は哲学の世界に踏み入ったばかりの学生には強烈でした。この『美と宗教の発見』が平成14年〔2002年〕に「ちくま学芸文庫」の一冊として再刊されることになり、その公刊にいささか係わりを持っていたわたしにはあの当時が再来してきたような感があって、内心の興奮を禁じることができませんでした。昭和45年〔1970年〕でしたか、わたしはニーチェの『ツァラトゥストラ』（Also sprach Zarathustra）を梅原猛の自宅で一緒に原語で読んでいただいたことがあります。あの時わたしの中にひとつのパトスが芽生えたような気がします。そのパトスはおそらく否定性のパトスであり、『ツァラトゥストラ』と「梅原猛」によって二重に倍加されたそれであったと思いますが、それはわたしにとり、ある時期の思い出というよりは、わたしの思索が常にそこへと回帰し、それにつながることによって命を得る哲学的パトスでありつづけています。あの否定性のパトスによってわたしは存在につながることもできたような気がします。存在者（das Seiende）ではなく、存在（Sein）にであります。

「存在」はポジティブな対象概念ではなく、むしろ対象としてわたしたちの前に立つことの決してない否定性の構造でしかないがゆえに、根源存在からの否定的パトスの湧出がない限りわたしたちは「存在」につながることはできません。『ツァラトゥストラ』と「梅原猛」という二重の否定性のダイモニオンによってわたしはわたしの思索をハイデガーのいう「眼前存在」（Vorhandenes）から「存在の思索」（Denken des Seins）に転ずるを得たのであります。ハイデガーの哲学は前期・後期を通して一貫して存在を目指した思索でしたが、転向（ケーレ）以降は「存在の生起」（存在のエルアイグニス）を待つ哲学となりました。意外に思われるかも知れませんが、また一般には理解されないかも知れないが、梅原猛の思索とハイデガーの後期の哲学はその構造を共にしているのであります。その研究のフィールドこそ異なるが、共に存在の到来を待ち、それに感応する哲学なのであります。ハイデガーの表現をもっていえば、「存在からの呼び声」（Anruf des Seins）に聴従する哲学なのであります。

『美と宗教の発見』は強烈な印象をもってわたしたち学生の前に出現しました。この書を今あらためて読み返してみても、あの時の強烈な印象は少しも色あせておりません。みずみずしさがまったく失われていないのであります。まったく年を取っていないのであります。ベートーヴェンの作品が年を取らないように、この書もまったく年を取っていない。なぜでしょうか。それはおそらくこの書がすでに巨大な否定性の告知、存在の次元からの告知だからではないでしょうか。言い換えれば、存在のある種の現出だったからではないでしょうか。存在は時間を超えた原理であるだけに、存在の真理は年を取らず、永遠にみずみずしいのであります。すべての天才の作品がそうであるように。

梅原猛は存在の真理を求めつづけた哲学者であったとって過言でないとわたしは思います。というより、存在から呼び求められつづけた哲学者であったといった方が正確かも知れませんが、ところが存在は、ソクラテス・プラトン以来、二千数百年にわたって「主観性の哲学」（die Philosophie der Subjektivität）によって隠蔽されつづけてきたのであります。ソクラテス・プラ

トンの主観性の哲学とヘブライズムの神という名の巨大な主観性が合体することによって出現した「西洋形而上学」（die abendländische Metaphysik）はまさに存在の真理の徹底的隠蔽であり、その一帰結でしかない西洋近代の哲学に梅原が何か満たされないものを感じつつけていたとしても、それはむしろ当然のことといわねばなりません。梅原が最初に大学で接した西洋近代の哲学は主観性（Subjektivität）が自己意識（自覚）にいたった哲学であり、そこでは哲学は己の知の吟味、「認識の哲学」にならざるをえません。主観性は一切を「自らの前に立てる原理」（Vorstellenする原理）であり、主観性はすべてのものを己の前に立つ対象と化さずにいません。したがってそこでは認識と対象の間に距離が生じ、「認識と対象の一致」（adaequatio intellectus et rei）が問われるべき課題として立ち上がってきて、認識の「正しさ」

（Richtigkeit）が問われねばならないことになります。特に自己意識（自覚）にいたった主観性は己の知の正しさに対する疑念と不安に苛まれざるをえません。この己の知の正しさに対する疑念と不安に苛まれつつけ、駆動された哲学者こそ、絶対確実な知（哲学の第一原理）を求めて奮闘した近代哲学の開祖デカルトであります。またアプリアーな認識を確保しようとして10年の思索の歳月を費やしたカントの批判哲学であります。デカルトのコギトの哲学やカントの批判哲学など、西洋近代の哲学において「正しさ」、「正当性」、「確実性」、さらには「誠実性」が前景に出てくるゆえんであります。「正しさ」、「正当性」、「確実性」が主観性の哲学の「真理」なのであります。その結果、近代哲学は総じて認識の哲学に墮していきました。わたしはこの事態を「墮した」と断じます。西洋近代の哲学は総じて己の窮迫の表現でしかなかったのであります。この動向は近代哲学全体を貫いた執拗かつ強力な動向であり、このことはフッサール現象学にいたるまで基本的に変わりません。少なくとも『イデーン』（I）の頃までのフッサール現象学が超越論的主観性の志向性分析を課題とした哲学である以上、そうであります。しかし「正しさ」や「誠実性」は、ハイデガーにいわせれば、真理の頽落態でしかありません。主観性が対象との一致をいかに確認しようが、したがって己の知の正しさ、誠実さをいかに称揚しようが、存在（Sein）は対象とはならない原理であるだけに、そういったものは存在の知ではないからです。「存在のエルアイグニス」（Ereignis des Seins）、「存在の開蔵」（Entbergung des Seins）こそが真理、ギリシア的意味での「真理」（Αληθεια）なのであります。

梅原がそういった西洋近代の諸哲学に違和感を覚えつつけていたとしても、それはむしろ当然のことといわねばなりません。梅原が欲したものは「正しさ」（Richtigkeit）ではなく、「真理」（Αληθεια）だからであります。根源的な存在の真理、存在の洞察だからであります。梅原は当時大学で主流となっていた哲学に苛立ちを隠すことができませんでした。京大の哲学に入ったからには、やれカントをやれ、やれヘーゲルをやれ、ドイツ観念論を勉強しなさいといわれたが、どこかしっくりこないものを感じつつけていたと後年梅原はやや恨みっぽく語っていたのが思い出されます。兵隊から帰ってからも死の想念から抜け出せなかった梅原にカントやヘーゲルの哲学がしっくりこなかったのは当然のことであつたでしょうが、しかし梅原の違和感は単に戦争体験の後遺症からだけのものではありません。当時大学で主流になっていた西洋近代の啓蒙的・理性的哲学は根本のところでは梅原の欲求に合致せず、梅原の心にヒットしなかったのであります。しかし、梅原の苛立ちは梅原個人の欲求や資質に由来するというよりは、

むしろ西洋近代の哲学の体質にこそその根拠があったといわねばなりません。梅原はいわば西洋2500年の形而上学の葛藤の中に立っていたのであります。しかしこのことを梅原はまだ自覚的に知っていたわけではありません。ただひたすらわけの分からない苛立ちに苛まれつづけていたようであります。「無茶苦茶勉強するんや、クサカベー！」というのは当時わたしが耳にした梅原猛の叫びであります。ずいぶん苛立っていたものだと思いますが、梅原の苛立ちは、ハイデガー流に言えば、西洋形而上学の「存在忘却」(Seinsvergessenheit)とそれに発する苛立ちだったのであります。梅原の苛立ちは歴史的なもので、個人的な葛藤に過ぎないものなのではありません。それを彼の個人的な性格なり資質に帰してしまうなら、「梅原猛」という現象は捉え損なわれてしまうであまりしょう。またそこで生起していた存在論的事態を正確に見届けることも不可能になってしまいます。2500年の西洋形而上学の歴史的、根源的動向の中で見ない限り、また西洋形而上学における存在忘却の根源性とその問題性に気づかない限り、「梅原猛」という現象とその本質は捉えられないであまりしょう。梅原猛は2500年の西洋形而上学の葛藤の中に立つ哲学者なのであります。「偉大なものは嵐の中に立つ」とプラトンはいっていますが(『国家』497 d 9)、梅原猛もまた西洋形而上学のいわば嵐の中に立っていたといって過言ではないのではないでしょうか。存在(Sein)と主観性(Subjektivität)という西洋形而上学の二大原理の歴史的葛藤の中に立つ哲学者、それが梅原猛なのであります。

§ 『美と宗教の発見』 — 正しい日本文化論の不在 —

『美と宗教の発見』に収められた諸論文によって梅原は西洋の思想から日本思想にその考察の目を転じました。これらの論文によって梅原は、自らの存在もそれにつながる文化に目を向けることによって、存在とのつながりを回復しようとしたのではないのでしょうか。梅原の本能は存在とのつながりを求めずにいないのであります。日本思想の考察に転ずることによって、少なくとも、存在につながったというある種の安堵感のようなものはあったであまりしょう。梅原のそれまでの苛立ちは存在から切れているとの感覚に根ざすものであったからです。ところが、そこでもまた存在は隠蔽され、歪曲され、捏造されていたとすればどうであまりしょうか。

梅原が考察の目を日本の思想に向けたとき、彼はそこに「正しい日本文化論の不在」を見ました。「国学者や水戸学者の偏見や、明治のナショナリストたちの独断や、その後の思想家たちのむら気な思いつきが、そこではそのまま真理として通用している」のでした。「こうしたさまざまな偏見により、日本文化の真の姿が覆い隠されるままになっていた」のであります(『美と宗教の発見』)。鹿が沢の水を求めるように回帰したその日本文化論において梅原が見出したものは、鈴木大拙、和辻哲郎、丸山真男、柳宗悦、正岡子規などといった近代日本の主観性の跳梁跋扈であり、近代的主観性のイデオロギーないしその「むら気な思いつき」による存在の隠蔽ないし歪曲の惨状でしかなかったのであります。梅原の怒りは当然ながら激しいものにならずにいませんでした。『美と宗教の発見』は怒りの書であります。梅原に最も耐えられないもの、それは偏ったイデオロギーとその独善による存在の歪曲ないしは隠蔽であります。存在の捏造であります。根源的存在からの呼びかけに忠実な梅原に最も許せないもの、それは西洋かぶれした近代的主観性による日本文化の歪曲ないし偽造なのであります。

§ 感情分析の哲学

現存在（人間）は存在への通路であります（ハイデガー）。存在は、エックハルトの洞察によれば、闇であります。人間は闇のパトスにおいて己が存在につながる存在者であることを感得します。とりわけ梅原はこの「感得」を確信する哲学者なのであります。「人間を通して存在の深い真理が現れてくるんや」と、かつて梅原はわたしに語ったことがあります。梅原は感情に特別な感応力を持つ哲学者でした。感情に共振する梅原の感応力はおよそ尋常のものでなく、異常に肥大化しています。それが何に由来するのか、天性の資質なのか、あるいは出生にその秘密があるのか、わたしはここでは問おうとは思いません。いずれにせよ、存在（闇）からのパトスによってはじめて梅原の思考は活性化し、働き出すのであります。

先にも述べたように、存在は潜在的な否定性の構造であります。永遠に対象となって浮かび上がってくるもののない沈黙の原理であります。存在がポジティブな知の対象となりえない理由は、それがそれ自体としては否定性でしかないという点にあります。存在は構造的な否定性として潜在層に伏在します。にもかかわらず、存在は立ち現れてきます。存在である以上、必ず顕在化してくる。否定性のパトスとして。とりわけ主観性の自己意識が肥大化し、それが存在を一対象に貶めるとき、存在はそれを否定するパトスとして猛然と噴出してきます。そのようなとき梅原はほとんど存在が噴出してくるその現場となり果てます。彼の思考は灼熱化します。火に近づいた炭のように赤化します。そのような灼熱の中にあって梅原は知るのであります。感情（パトス）こそ存在の声であり、感情（パトス）の中にこそ存在の真理の告知があることを。梅原がある時期「感情分析」を彼の哲学の方法とすることを宣言したゆえんであります（『笑いの構造——感情分析の試み』角川選書、1972年）。

これは梅原の個人的見解といった単純なことなのではありません。理性（ラチオ）を過剰に称揚し、感情（パトス）を貶めてきた啓蒙期以来の西洋近代の哲学思想の根深い傾向性に対する梅原のプロテストの宣言でもあるのです。いわばソクラテス・プラトン以来の西洋の知性哲学に対する歴史的挑戦といって過言でないでありましょう。ディオニュソスという暗い情念の神を復権させてソクラテスに疑問符を突き付けたニーチェ哲学と軌を一にする挑戦ということもできます（ニーチェ『悲劇の誕生』参照）。もっともこの時期梅原はこの挑戦を自覚的に行っていたわけではありません。それでも何か途方もないものと戦っているという感覚はあったようで、已むにやまれぬ想いに突き動かされた苦悶の言動であったといって過言でないでありましょう。当時の大学の一般的な研究スタイルであった文献考証的、実証的な哲学研究に対する不満と不信をことあるごとに口にしていた梅原の言動をわたしは今も鮮明に記憶しています。光の神アポロンと闇の情念の神ディオニュソスを対置したニーチェの『悲劇の誕生』によく講義で言及していましたが、もちろんディオニュソスに自らの想いを仮託するという仕方においてであったことはいうまでもありません。情念と陶醉の神ディオニュソス的精神こそ当時の梅原が共感する精神でした。あの当時ニーチェ哲学が梅原の依拠するほとんど唯一の哲学であったといって過言でないでありましょう。

§ 笑いの哲学

この観点から梅原は一時期「笑いの哲学」を構想したことがあります。死の想念にとり憑かれ

た青年時代からの暗い妄念を一掃するべく、いつまでも絶望してばかりもおれんということで取り組んだ試みであったとのことですが、結局それは達成されませんでした。「人間は笑うことによって不気味な動物であるが」とニーチェもいっていますが、実は「笑い」は人間の実存の根幹に係わる根源的現象であり、この現象の解明に成功した哲学者はまずなかったといって過言ではありません。ベルグソンやバタイユもこの概念に手を出していますが、この現象の根本的な解明といえるようなものにはとうていなりえておりません。「笑い」が解明されたとき、そのときはじめて人間の実存の秘密もまた明らかになるといって過言でないでありましょう。「笑い」を得てしまった人間がいかに奇怪な、見方によっては悲劇的な存在であるか、明らかになるでありましょう。梅原が「笑いの哲学」に挫折したとしても、それは無理からぬことであったといえなくもありませんが、しかしここで重要なのは、「笑い」も含め、感情（パトス）の中にこそ存在の真理の告知はあるという梅原のその洞察であります。これは梅原猛の終生変わることのない哲学的信念でありつづけました。

§『隠された十字架——法隆寺論』『水底の歌——柿本人麻呂論』

梅原はいつも待っていました。根源的存在からの呼びかけを、激しいパトスを。根源から湧出してくる激しいパトスの中であってこそ、梅原の思考は冴えます。パトスの中であって梅原の思考は透徹し、パトスの嵐の中であって梅原はむしろ冷静であります。梅原が動揺を示すのは、むしろパトスが途絶えそうなときです。パトスが途絶えたとき、彼はもうほとんど抜け殻同然でした。そのような梅原猛をわたしは何度も目にすることがあります。例えば『隠された十字架——法隆寺論』（昭和47年）や『水底の歌——柿本人麻呂論』（昭和48年）が刊行された直後の彼がそうでありました。

昭和45年〔1970年〕から昭和47年〔1972年〕にかけての立命館大学退職後の浪人時代が梅原猛の最初の創造の時期であります。この時期を後年梅原は「最初の発情期」と述懐していましたが、当時梅原は汲めども尽きぬ着想の湧出にほとんど狂わんばかりでした。根絶やしにされた太子一族の怨霊や流罪に処せられて水底に沈められた人麻呂の霊が乗り移ったかのようでした。あの当時梅原は明らかにそれらの霊にとり憑かれていました。ある朝、北白川の自宅に訪ねたとき、梅原は、昨晩は60枚書いたなどといって、眠そうな顔をして出てきた姿が今も鮮明に思い出されます。狂おしいまでに湧き上がってくるパトスによって生み出されたこれらの著作は当然ながら圧倒的な迫力を持つ作品として世に出現しました。その社会的反響もまた大きいものがありました。法隆寺は太子一族の怨霊鎮魂の寺であるというのが梅原猛の法隆寺論ですが、文化遺産としてロマン的に眺められるのが常であったあの大和の古刹・法隆寺を「怨霊鎮魂の寺」といったのですから、当時の世論一般に対するそのインパクトがいかに大であったか、想像に難くないでありましょう。『隠された十字架——法隆寺論』はベストセラーになり、1972年の第26回毎日出版文化賞に輝きました。ところが、そのような成功の中であって梅原はむしろ危機の状態にあったといえ、意外とされるでしょうか。社会的評価はもちろん梅原にとっても嬉しいことでしたが、喜びは肯定的パトスです。それが否定性のパトスを枯渇させるのではないかと梅原は焦ったのであります。否定性のパトスが途絶しそうなとき、存在に見捨てられそうな気がするのでしょうか、梅原は本当に不安げな顔をします。「恨みを増幅せなあかんの

や、クサカベー！」とは、その頃わたしが耳にした梅原猛のうめき声であります。

繰り返しますが、梅原哲学の本質は対象的、分析的思考にあるものではありません。西田のいう対象論理にあるものではありません。理性的分析による対象の解析にその課題が置かれていたものではありません。むしろ対象とはならない潜在する存在からの呼びかけにこそ、梅原は感応し、奮い立つのであります。梅原哲学は隠蔽された存在から湧出してくる否定性のパトスによってはじめて命を得、知を開く哲学なのであります。闇のパトスによって存在につながり、燃え上がる哲学なのであります。

§ 日本の古代史研究 — 藤原不比等 —

梅原が最初の日本思想の研究において見出したものは近代日本の主観性のイデオロギーによる日本文化の歪曲ないしは隠蔽の惨状でした。近代の主観性によって隠蔽されたとするなら、その隠蔽の向こうにこそ本来の日本文化があるに違いない。そのような予想のもとに梅原は古代史の研究に向かったと思いますが、ところが七、八世紀の日本の古代史研究においてもまた同じことが起こりました。記紀神話は決して太古からの伝承でなかったのであります。有史以前の、それこそ原初の神々の記憶を今に伝えるものではなかったのであります。『古事記』も『日本書紀』も藤原不比等の手になるか、ないしは不比等の指導のもとになったものであると梅原は、上山春平氏と共に、推測します、というよりは、洞察します。ということは、記紀神話は時の権力者、藤原不比等という主観性の作為でしかないということであります。天皇家を中心とする藤原一門の権力体制を正当づけ、磐石のものにするという密かな意図が秘められた史書が『古事記』であり、『日本書紀』であるとするなら、記紀神話は日本の歴史的存在の記録であるどころか、それを歪曲し、隠蔽するものでしかないのではないかと、梅原はこう疑います。否、むしろそう確信します。これが事実とすれば、戦慄すべき事実といわねばなりません。日本そのものを偽造した男、それが藤原不比等なのであります。しかも日本は今日にいたるもこの不比等の捏造のもとにあるとすればどうでありましょう。今日もなお維持されつづけている天皇家を頂点とした間接統治の官僚国家体制を生み出した男こそ、不比等なのであります。天皇を実体性のほとんどのない象徴的存在と化し（西田のいう「無の有」と化し）、その下で太政官が権力を行使する間接統治の律令国家体制誕生の陰の人物こそ不比等であったと、上山氏と共に、梅原は断じるのであります。この政治体制はその後も摂関政治として平安期を通じて長く維持されつづけたが、のみならず、今日にいたるもなお基本的にこの体制が堅持されているとすればどうでありましょう。不比等の作ったこの体制がいかにしぶといものか、太平洋戦争の惨敗という壊滅的な事態に直面しても、頂点である天皇家そのものが廃されるということはなく、なお構造としては事実上「国体」が維持されたこと、また焼野原から立ち上がり、高層ビルの林立する今日の超近代的な新生東京においてすらも、天皇の間接統治を頂点にした飛鳥・奈良時代以来のこの官僚国家体制が存続しつづけ、この機構が皇居を取り巻く永田町や霞が関といった官庁街から日本全体を支配・コントロールしているのを見ると、感得されるでありましょう。いかなる政変があっても決して国家の基本構造そのものは変わらない、そのような仕組みを作り出した男こそ、不比等なのであります。これは世界に例を見ないある意味見事な国家創造といえることができます。世の東西を問わず、政変はすべからず王朝の転覆を意味し、国家体制そのものの転換となり

ました。当然その災禍は甚大なものになりました。多くの帝国が滅亡しました。世界史がわれわれに教えるところはまさにそのことであります。ところが日本では、戦国時代という1世紀以上もつづいたあの動乱期においてすら、国の基本構造そのものは変わらず、維持されつづけたのであります。あの当時、梅原は日本をグランドデザインした男、藤原不比等と対決していたわけであり、途方もないことであります。「権力は必ず歴史を偽造する」と梅原はいいます。わたしは、もう少し一般化して、「主観性は必ず存在を隠蔽する」とっておきたいと思います。

§ 天つ神と国つ神、神々の流竄。

しかし、不比等を俟つまでもなく、日本の歴史は実はそれ自身が隠蔽の上に立つ歴史なのであります。一万年以上にわたって日本列島に先住した狩猟採集の縄文文化を「地」とし、その上に「図」となって浮かび上がった稲作農耕の弥生文化の歴史が日本の顕在的歴史であります。弥生は主観性の文化であります。それに対して縄文は存在（構造的なピュシス）の文化であります。主観性は必ず存在を隠蔽します。主観性の立ち上がりは存在の隠蔽を伴わずにいないからであります。弥生の立ち現れは必然的に縄文の隠蔽にならずにいないのであります。むしろ、弥生は縄文の隠蔽であることによってはじめて弥生でありうるのであります。弥生が縄文を隠蔽することは、政治的、歴史的作為というよりは、存在論的生起なのであります。弥生という主観性が到来した以上、日本の歴史は隠蔽を内包する二重構造の歴史にならざるをえなかったのであります。

日本の歴史が隠蔽の歴史であることは『古事記』においてすら示唆されています。日本の正史は大和朝廷につながる天つ神の歴史であります。天つ神降臨のはるか一万年以上も前から日本列島に居住した先住の国つ神は一体どうなったのでしょうか。国譲り神話の裏にはおそらく天つ神による国つ神の駆逐、隷属化、あるいは殲滅の凄惨な歴史が秘められているのでありましょう。

これを梅原は『神々の流竄』（集英社、1985年）で問いました。出雲大社は畿内一帯に先住していた神々を一括して山陰の地に流したものであると梅原は推測します。都市文化といったものがほとんど見られなかったあのような侘しい山陰の地に突然巨大寺院が出現した次第は、こう考えない限り説明がつかないと梅原はいいます。天つ神によって国つ神は流され、山陰の一面に封印されたのであります。言い換えれば、地下世界に封印されたのであります。国つ神を地の下の住人とする日ノ本における政権が大和政権であります。「日本」という国名が意味するところは日の当たる地の上の国であるということであり、それはその下に日の届かぬ地の下の国があることを言外に語っているのであります。あらゆる権力がそうであるように主観性は統一の方向に一元化を志向する原理であり、主観的政権である大和政権にとっては身近で異類の神々に乱舞されていては困るのであります。目障りなのであります。しかし神々を殺すことはできません。神々は、神である以上、死にません。であるがゆえに山陰の一面に封印しなければならなかったということでありましょう。

§ 日向神話

ちなみに梅原は大和政権のルーツ、言い換えれば、天皇家の出自を問う意味から後年日向神話に手を出しました（『天皇家の“ふるさと”日向をゆく』新潮文庫、2005年）。これをいえば殺されるかも知れないと思ったそうですが、もうこの年まで生きたのだからよいかと思ったとのことであります。事実そう梅原は言っていました。梅原は1925年の生まれなので、この頃80歳前後だったことになります。わたし自身は小心者でそのようなことを問題としうるほどの勇氣は持ち合わせませんので、またこの年になってもなお殺されてもよいなどとはとても思えないので、日向神話については、言及するのみで、その内容に立ち入ることはここでは控えさせていただきたいと思います。

S 縄文の発見

梅原はおそらく弥生文化の性格、あるいは古代大和政権の性格を知れば知るほど、その主観性性格に印象を強めざるをえなかったのでありましょう。それは同時に日本の歴史は隠蔽の歴史であるとの印象を強めることでもあります。主観性ということと存在の隠蔽ということはほとんど同義だからであります。日本の歴史が隠蔽の歴史であることに気づくことによって梅原は日本の基層文化、縄文を発見したのであります。隠蔽に気づくということは隠蔽の下にあるものを予想させることでもあるからです。しかし「縄文を発見した」といっても、考古学的な対象としてそれを見出したとか、有史以前の歴史的事実としてそれを語ったというようなことではありません。そのようなことは幾多の考古学者や歴史学者があまた語っています。そのようなことなく、縄文が存在することに梅原は気づいたのであります。隠蔽され、潜在化しているにせよ、それがなお存在であること、存在でありつづけていることに梅原は気づいたのであります。

梅原猛にとって縄文は対象ではありません。それは存在なのであります。潜在的な存在なのであります。存在であれば、当然それは顕在化してきます。縄文の顕在化、縄文の現出が梅原猛において生起します。

梅原猛は悲しみの人であります。悲しみにこそ梅原は感応します。縄文には悲しみがあるのであります。隠蔽された歴史は当然悲しみの歴史ですが、それだけではない。存在は悲哀なのであります。存在が悲哀であることは、存在の特権的現出である芸術作品においてわたしたちの感得するところであります。すぐれた作品はすべて悲しい。また悲しくないようなものはすぐれた作品とはいえない。この点に主観性のまがい物か、存在の特権的現出である芸術作品かを見分ける基準があります。（この点については芸術作品を存在の特権的現出として解析したハイデガーの『芸術作品の根源』を参照いただきたい。）縄文は存在であるがゆえに悲しみを蔵しているのであります。そこからは悲しみが呼びかけてきます。またそこには怒りもある。顕在的歴史、正史が日ノ本で輝けば輝くほど、日の届かぬところには怒りが蓄積します。怨念が鬱積します。縄文という存在から浮かび上がってくる悲哀と怒りのパトスに感応することによって梅原は縄文とつながるのであります。悲しみのパトスによって梅原は縄文にとり憑かれました。イエーツが亡国の民、ケルトにとり憑かれたように。

深層にあるとはいえ、縄文は存在であります。存在は個性性を越えた否定性であります。その現出も当然個性性を越えたものにならざるをえません。縄文への梅原の傾倒が尋常の域を越えるゆえんであります。梅原の縄文への傾倒は反省的レヴェルのそれではありません。それはほと

んど囚われであり、憑依なのであります。梅原猛は憑依の哲学者であります。このことは本人にも自覚されていたことで、「乗り移られんとよいものは書けませんからね」とかつて梅原はわたしに語ったことがあります。梅原の著作はすべて梅原猛にとり憑き、乗り移った累々の神々の証といって過言でないであります。梅原は個性性を越えた何ものかに囚われ、それに突き動かされ、駆り立てられていたのであります。これは上山春平氏が証言されていることですが、あの当時梅原は「ものすごい高揚状態」にありました。それは明らかに憑かれた状態でした。基層存在に憑かれ駆り立てられた高揚状態、それがあの当時の梅原猛であったとわたしは思います。わたしたちは梅原猛という個体において縄文という歴史に潜在する超個体的存在の現出を経験するのであります。縄文という基層存在がその姿を垣間見せてくることに驚き、かつ魅入られるのであります。

縄文に憑かれた梅原は縄文のわずかな痕跡も探し出そうとします。縄文の痕跡を求めて梅原はアイヌに、あるいは沖縄に赴きます。あるいは東北の蝦夷文化の遺跡に縄文の遺民の名残を尋ねます。あるいは熊野を訪ねる。梅原が宮沢賢治に惹かれるのは、賢治が山人、里人とはおそらく異なるルーツを持つ人々である山人の世界をたぶんに示唆するからであります。賢治の童話の語りの中には異界がその姿を垣間見せているのであります。梅原は異界を求めてさすらう旅人と化します。古代メソタミアに、古代ギリシアに、あるいはインドに、あるいは中国に、梅原は異界を求めて旅をします。それをわたしは、若干哲学的に、「存在の故郷を訪ね求める梅原猛の旅」と形容しておきたいと思います。

§ 縄魂弥才

弥生に駆逐されることによって縄文は日本列島の辺境に追いやられました。アイヌと沖縄は縄文の遺民であり、そこには縄文の名残が、かすかではあれ、秘蔵されていると梅原はいいます。もちろんその間に縄文と弥生の混血が進行したことであります。その結果、縄文人の魂と弥生人の才覚を兼ね具えた「日本人」という独特な、ある意味稀有な人格が形成されたと梅原はいいます。これを梅原は「縄魂弥才」と表現します。縄文人の魂と弥生人の才覚ということでありましょう。この二重性格が日本人の基礎性格になったと梅原はいいます。世界に冠たる技術立国を樹立する反面、時には突如として特攻にもいく、あのような強烈な精神性を発揮する、欧米人には何とも不可解な日本人種はこうして誕生したというのであります。

縄文の遺跡からしばしば白木の遺物が発掘されることを梅原は指摘します。例えば能登の真脇遺跡から発掘された環状木柱列なども日本の白木文化のルーツのひとつと梅原は見なすわけであります。白木の御宮や白木の御柱など、白木は「清く明るく正しい誠の心」という日本神道のスピリチュアルティを最も象徴的に示すものとして今日のわたしたちにもごく素直に受け止められています。その源流はやはり縄文にあったというのが梅原猛の見解なのであります。梅原によれば、白木は日本の国家神道を象徴するものというよりは、むしろ縄文人の魂の性格を物語る遺物なのであります。これも梅原がいていたことですが、日本の神社はすべて森の中にあるということがそのルーツが縄文であることを物語ってはいないでしょうか（森の思想）。縄文人の宗教はおそらく森や白木によって物語られているような清冽な精神性を核にした多様な自然宗教であったと想像されますが、それがやがて大和政権によって伊勢神道へと改変され、最終的に国

家神道に収斂されたというのが梅原猛の大雑把な日本の宗教史観なのであります。「日本の宗教は元来は多様な表現形態をもったアニミズム的自然宗教であったが、それらのすべてが日本では天皇制イデオロギーのもとに国家神道というひとつの疑似一神教に一元化されてしまった」と語ったところ、「そんなことはないだろう、天理教があるじゃないか」とA.j.トインビー氏にいわれたそうであります。まさか天理教が出てくとは思わなかったので驚いたとのことでした。

ちなみに、この「日本人とは何か」「日本文化とは何か」という問いが時の内閣総理大臣中曽根康弘氏に感銘を与え、国際日本文化研究センター設立のきっかけになりました。中曽根氏と今西錦司氏や桑原武夫氏らを交えた梅原の直の懇談は1984年の秋に京都南禅寺境内の野村別邸で持たれました。

しかし梅原のこれらのテーゼは科学的仮説といった類のものではありません。実証的に検証されるべき科学的認識の類ではない。それは梅原にとってはほとんどアプリオリー、「歴史的アプリオリー」ともいうべき認識なのであります。たとえどれほど不利な証拠が提出されようとも、梅原がこの認識を変えることはないであります。それは対象論理的思考によるものではなく、いわば存在との共振ともいうべきものに基づく確信だからであります。潜在的な基層存在（縄文）との共振なのであります。

しかし、梅原も一応学的論証を心がけはします。アイヌをコーカソイド（西洋人種）とする学会の通説に反対して、アイヌも倭人と同じモンゴロイドであることを、ただし和人が新モンゴロイドであるのに対しアイヌは古モンゴロイドであることを、埴原説に依拠しつつ、梅原は力説します。またアイヌ語と日本語を異なる言語体系に属する言語とする金田一説に反対して、両言語とも古語においては同根であることをさまざまな例証を持ち出して実証しようとしします。語根までたどると、そこにアイヌ語との多くの共通点が現代日本語の中においてすら見られることを梅原は指摘するのであります。

しかしそれらの論証はどこか足りないのであります。アイヌ文化を正嫡のものと認知させようとする梅原の執拗なまでの論証努力は、それはそれとして受け止めねばなりません。それでもそれらは梅原の確信の深さに似合った論証というにはどこか足りないのであります。梅原の確信の深度にとうてい及んでいない。わたしがむしろ注目するのは、梅原の確信の強さ、想いの深さ、さらにいうなら、その根深さ、執拗さであります。梅原の確信は学的論証によって得られるようなものではないのであります。対象分析によって実証できるような類のものではない。人が梅原説に同意するとするなら、その論証に納得したからというよりは、その想いの強さに負けてしまうからではないでしょうか。梅原の確信は反省的レベルのそれではありません。個性性を越えた存在との共振によるものなのであります。

§ アイヌ

梅原が突然アイヌをいい出したとき、わたしたち学生を驚かせましたが、それが好事家的な関心によるものでないことはすぐに感得されました。梅原はアイヌの中にあって本当に安らかな満足げな顔をします。イナウの作り方をアイヌの人々から教わっているときの梅原のあの嬉しそうな顔は今もって忘れられません。梅原は若い頃何度も北海道にアイヌを訪ね、熊送りの祭礼（イオマンテ）などにも参加しています。アイヌの世界はカムイ（神）の世界だとやや興奮気味に

語っていた姿が今でも鮮明に思い出されます。おそらくアイヌによって梅原は神々の世界につながるものでありましょう。アイヌにおいて梅原の苛立ちは鎮まります。なぜアイヌや蝦夷にそんなにも惹かれるのか、梅原自身も不思議に思ったと見えて、自分の血がそれにつながるのではないかと考えたこともあったようですが、それは事実でなかったようであります。いずれにせよ、アイヌ、蝦夷、沖縄においてわたしたちは弥生文化（主観性文化）の苛立ちから解放された梅原猛を見るのであります。

したがって梅原のこういった語りの裏面に主観性文化の先鋭化した現出ともいうべき近代の科学技術文明に対する深い疑問があります。アイヌを語るその返す刀で梅原は近代文明に対してさまざまな告発の言辞を発することになります。

§ 文明と森の思想 — ギルガメシュ叙事詩 —

縄文との対照において梅原は、年を経るにつれて、「文明」というものの問題性、宿業性をますます意識するようになりました。梅原は近代の科学技術文明を凝視します。そしてそこに存在を損なわずにいない極めて危険なものを見て取ります。文明の中で存在のエートスが壊れていくことに梅原は耐えられないかのようであります。文明による森の破壊を梅原は座視することができません。梅原はあらゆる機会を捕らえ、さまざまな思想をもって、近代文明を告発します。近代文明の犯罪的ともいうべき所業を指摘します。梅原は環境破壊を問題にします。原発を告発する。有明海のムツゴロウに想いを馳せます。梅原は仏教を語ります。天台本覚思想「草木国土悉皆成仏」を語ります。森の思想を語る。3・11のカタストロフを梅原は「天災であり、人災であると共に、文明災でもある」と断じます。近代文明に対する梅原の告発は激しく、その語るところは時に思い詰めたような印象すらありました。文明が人類を滅ぼすかも知れないと梅原はいいます。そう語ったときの梅原の顔が今もって忘れられません。人類を滅ぼすかも知れない文明とは、一体何なのでしょう。

しかし文明が存在の毀損を伴うことは実は存在論的事態であって、告発や何らかの政策によって止むようなものではないのであります。というのは、文明とはまさに主観性の立ち上がり、ハイデガーの表現でいえば、「主観性の蜂起」に他ならないからであります。文明の存在論的根拠は西洋形而上学のもう一方の推進原理である主観性原理（Subjektivität）なのであります。主観性は存在を損なわずにいません。文明は当然自然を毀損し、森を荒廃させます。自然の破壊、環境の破壊、言い換えれば、存在のエートスの毀損であることによってはじめて、文明は文明でありうるのであります。シュペングラーは文化の死せるものが文明であるとしています（シュペングラー『西洋の没落』参照）。文化の死なくして文明が立ち上がることはないのであります。文明と自然の共生といったことがいわれていますが、ごまかしの論理であるとの印象をまぬがれません。主観性（Subjektivität）と存在（Sein）は決して和解しえない西洋形而上学の二大原理なのであります。それはヘブライズムとヘレニズムが決して和解できない西洋の二大精神であるのと同様です。いかんとしても和解できない精神の二つの血脈が同じ地球上に同時存在するというのはまったくもって不可解としかいいようがありませんが、ヨーロッパの歴史はまさにこの二大精神の対立と抗争の歴史でした。これら両血脈が和解できないことは事実20世紀という高度な文明の時代になってなおアウシュビッツが起こったことから感得されるでありましょう。

以上のことは西洋形而上学（die abendländiche Metaphysik）の全体を見ることによって始めて認識される歴史的、存在論的事態であって、個々の事実の問題に尽きるものではありません。特定の政治なり政策に起因する程度の問題なのではありません。都市文明の勃興は森の神フンババの殺害を必然のこととして伴わずにいないのであります。

この理が3500年も昔のシュメールの神話『ギルガメシュ叙事詩』の中にすでに語られていたという事実を知って、梅原は衝撃を受けたようであります。この真理を告げ知らせねばならないという使命感に捕らえられでもしたのか、梅原は憑かれたように戯曲『ギルガメシュ』（昭和63年）を書きました。またことあるごとに梅原はギルガメシュ神話を語ります。ギルガメシュを語る梅原には「ギルガメシュ叙事詩を語り歩くホメロス」とでもいった風貌が当時ありましたが、しかし梅原の想いにもかかわらず、戯曲『ギルガメシュ』は、1996年の北京での公演はともかくとして、著書としては世間の反応はそれほどでなかったようであります。売れ行きが今ひとつなのでなぜだろうと思って読み返してみたところ、『ギルガメシュ』は梅原がそれまでに書いたものの中で「最も哲学的だった」というのですから、もう笑う他ないわけであります。哲学は人類には不向きなのでしょうか。特にスマホを手から離さない現代人にはそのような風があります。今日哲学はほとんど消え去らんとしていますが、哲学を消してしまってはならないと、わたしは梅原猛と共に深く想うものであります。

§ 仏教 — 親鸞と二種回向説 —

また梅原は仏教を語ります。聖徳太子について梅原はライフワークともいうべき大部な著作をものしていますし（『聖徳太子』Ⅰ～Ⅳ、1980～85年）、『法然の哀しみ』（小学館、2000年）はベストセラーにもなりました。三人の祖師（最澄、空海、親鸞）の洞察に満ちた著述も残しました（『三人の祖師』小学館、2002年）。踊り念仏を都の辻々で実践した空也やそれを鎌倉時代に全国に広めた一遍上人についても語っています（『梅原猛の仏教の授業』PHP文庫、2012年などを参照）。また円空についてもとり憑かれて書きました（『歓喜する円空』新潮社、2006年）。いずれも名著ということができるとは思います、しかし梅原猛が哲学者として最も深い洞察を込めた著述はやはり親鸞に関するそれであったとわたしは思います。

親鸞は近代日本思想の黎明期、清沢満之や倉田百三の著書の影響などもあって、悪人正機説を説いた仏教思想家として脚光を浴びました。自意識が芽生えつつあった近代日本の思想・宗教界にあって、己の煩悩の救い難さに激しく懊悩する一種の実存思想家として注目されたわけがあります。しかし梅原は親鸞のこの面はそれほど重要視しません。否、むしろ親鸞の思想を悪人正機説一辺倒にしてしまうことは、親鸞の本来の思想を歪め、覆い隠してしまうことになるとして、こういった一般に流布している親鸞像には警告を発してすらいいます。親鸞の本来の思想は『歎異抄』に見られる悪人正機説ではなく、『教行信証』の中に現れている二種回向説にこそあるというのが梅原猛の親鸞解釈なのであります。往相・還相の二種回向の説であります。あの世にいき、そしてそこからまた衆生を救うためにこの世に戻ってくるという往還の思想、ここに梅原は世界の各地に遍く見られる人類の根源的思想ともいうべき自然の循環思想の日本仏教における現れを見ます。自然の循環という思想は人類が太古から遍く共有してきた根源的思想ともいうべきものであり、この循環思想は中近東にも見られるし、古代ギリシアにおいてもヘラク

レイトスやストア哲学の中に「世界大火と永劫回帰」の思想として現れています。ニーチェの「同一物の永劫回帰」の思想も、この人類太古の記憶ともいうべき思想が「力への意志」や「ヨーロッパのニヒリズム」などの思想と結びついて近代のヨーロッパに出現したものであると梅原は考えます。アイヌの熊送り（イオマンテ）もそうです。熊の魂をあでやかに装った姿に化粧してあの世に送り、そしてまたわたしたちのもとに肉として帰ってきていただく、この循環の思想が熊送りの本旨であることを梅原はさまざまなところで情熱を込めて語っています。循環の思想は縄文の思想でもあれば、太古以来の人類に共通する記憶ともいうべき自然思想でもあるのです。そしてまさにこの循環思想の日本仏教における蘇りが親鸞の二種回向説であると梅原は考えるのであります。もちろんそこでは浄土真宗の絶対非力の他力本願思想と結びついた形で語られてはいますが、二種回向の思想そのものは、その本来性においては人類の太古からの記憶ともいうべき自然の循環思想であり、それこそ存在の思想なのであります。基層存在（ピュシス）の摂理に根ざす思想なのであります。親鸞という自らの煩悩に懊悩した強烈な自意識の奥底から人類の根源的記憶ともいうべき自然の循環思想が浮かび出てきていたというのは、何とも不思議な現象で、梅原ならずともわたしたちの瞠目せずにおれないところであります。90歳近くまで生きた親鸞が生涯の最後まで手を加えつづけた書が『教行信証』ですが、ここにわたしたちは実存の内奥から基層存在が立ち上がってくる、その現場になった親鸞を見るといって過言でないであらうでしょう。梅原の洞見するところでは、親鸞は浄土真宗という巨大宗教教団の始祖となった宗教家であるだけでなかったなのであります。むしろ平安期に基層存在（ピュシス）をはからずも現出させた哲学者なのであります。

これは逆説的に聞こえるかも知れませんが、自意識の強い人間ほど存在の現出の現場になりやすいのであります。その理由は、自意識が強烈化するとき、その人間はハイデガーが実存の頹落態として語った「マンの公共性」（『存在と時間』）を突き抜けるからであらうでしょう。強烈な実存的懊悩の中からこそ、その我性（Ichheit）を突き抜けて、根源存在が現出してくるのであります。主観性（我性）がいかに過激化しても、否、むしろ過激化すればするほど、その根源に基層存在（ピュシス）が潜在することがますます鮮明になってくるのであります。「人間を通して存在の深い真理が現れるんや」と梅原は繰り返し語っていましたが、「人間」というのは、それ自身、その底に何があるのかよく分からないような、また何が立ち上がってくるのか当人にも予測できないような不気味な存在であるわけであります。そのような「人間」を梅原は生涯凝視しつづけました。

これは私見になりますが、梅原が生涯にわたって最も関心を持ちつづけたものはやはり「人間」であったといえると思いますが、その人間を通して浮かび出てくる「存在」に肉薄していこうとしたところに梅原哲学の深化があったということができるとわたしは思います。梅原も若い頃は一種の実存思想家であったといって間違いないと思いますが、年と共に存在の哲学者に変貌していったということが出来ます。年が加わると共に実存の基層に潜在する存在に吸い寄せられるかのように実存の内奥を凝視するようになったと、これを言い換えることもできるのであらうでしょう。その点で梅原哲学は現存在（Dasein）の実存哲学から、転向（ケーレ）を経て、「存在の思索」（Denken des Seins）の哲学に変貌していったハイデガー哲学と軌を一にする軌跡を描いたということが出来ます。もっともハイデガーは、人間（現存在）は、これを早々と見捨

ててしまいましたが、梅原はあくまでも人間に固執し、そしてその人間を通して現れてくる存在の真理に肉薄しようとしつづけたという点で、両者は異なっていたということはできるでありましょうが。しかし、いずれにせよ、梅原とハイデガーは、そのフィールドこそ異なりますが、ほぼ同じ軌跡を描いた哲学者なのであります。すなわち「実存から存在へ」の軌跡を描いた哲学者なのであります。この動向にレヴィナスは猛反発して、「存在から実存者へ」の哲学を語りました。

§ 能 — 世阿弥と天台本覚思想 —

梅原は晩年世阿弥に傾倒しました。「秦河勝」や「世阿弥」など、「スーパー能」と称して自ら作能も行っています。ところで能は敗者の恨み、裏切られた女の未練など、執心や怨念といった業から逃れられない人間の魂の鎮魂を幽玄の中に表現する舞台芸術であります。特に世阿弥の複式夢幻能がそうであります。もちろん梅原も幽玄美としての能芸術の卓越性、天才的能作家としての世阿弥の才能に賛辞を送ることに躊躇するものではありません。梅原が愛惜して已まない言葉は世阿弥の「秘すれば花」であります。「これは死して咲くということであり、大変危険な複雑な言葉ですよ」と、かつて梅原はわたしに語ったことがあります。しかし、こういった幽玄としての能の芸術性もさることながら、梅原が世阿弥に特に惹かれるのは、世阿弥の能の中に天台本覚思想を見るからであります。特に「高砂」「西行桜」「当麻」「殺生石」「白楽天」などの能に天台本覚思想が色濃く現れています。そこでは鶴や蝶や魚といった動物が、それにまた桜や柳や梅などの精が、否、石すらが、シテとなって登場し、怪獣や雪なども怨霊となって登場します。山川草木国土悉皆成仏、人間や動物はもちろんのこと、草や木、国土にすら、仏性が宿っているという平安時代に生み出されたといわれる日本独自の仏教思想が天台本覚思想ですが、ここに梅原は縄文以来の日本人の基層に宿る自然思想の平安期における蘇りを見ることができます。縄文以来のこの根源的な自然思想がいわば渡来の文化である仏教思想の中に蘇ってきて、その思想と合体して現れていることに梅原は驚き、かつ神秘を感じるのであります。源氏物語や古今和歌集など王朝文化華やかかなりしあの平安期に日本人の古層に伏在する根源的記憶ともいうべき縄文以来の自然思想が、それも文化繚乱たる都のそのすぐ傍で浮かび出てきていたというのは、何とも不気味な現象で、これまた瞠目すべき現象といわねばなりません。主観性の文化が華麗に立ち上がればあがるほど、その足元で存在（プシス）もまた必ず現れ出てくるのであります。これは世の東西を問わない普遍的現象ということができ、同じ現象は古代ギリシアにおいても大規模に見られます。特に初期ギリシアの哲学やソピストといった現象においてわたしたちはそのような現象を何度も目撃することができます。

§ 井筒

世阿弥の三番能「井筒」では、捨てられた女が、最初は古びた寺の塚に花を手向ける娘の姿で、次にかつての恋人業平の衣装を身につけて偲び、遂には狂い踊る怨霊として、そして最後に旅の僧侶の読経に礼をいって立ち去る女として登場しますが、彼女は僧侶のカウンセリングによって救われたわけでは決してありません。草木国土悉皆成仏、草も木も土すらも仏であるとい

う天台の本覚思想によって、一切仏性たる森羅万象に帰一し、そのことによって我性を消滅させたのであります。我性（Ichheit）が消散すれば、未練や怨念もまた消散します。これが天台本覚思想による解脱であります。我性（Ichheit）、自我意識を残したままではいかなカウンセリングをもってしても怨霊と化した凶女を救うのは難しいでありましょう。存在の到来、存在（ブラフマン）への帰一にこそ、人の救いはあるのであります。梵我一如（ブラフマンとアートマンの一性）というのは深い思想であります。これは仏教のみの思想ではありません。否、むしろ仏教成立以前に遡る古代インドのヴェーダの究極の思想なのであります（ヴェーダンタの第四書『ウパニシャッド』参照）。おそらくそういったインドの古代思想にも通ずる天台本覚思想を背景にする世阿弥の複式夢幻能は今日の臨床心理のカウンセリングのありようにも示唆するところあるとわたしは思います。世阿弥は、梅原にとっては、能舞台を介しての天台本覚思想の告知者であり、言い換えれば、存在（ピュシス）の思想を告知する哲学者なのであります。縄文以来の日本人の古層ともいうべき自然思想の舞台上での布教者、それが世阿弥なのであります。

河原乞食といわれた能役者世阿弥を梅原は「縄文系」といつていたのが思い出されます。中世の能芸能の大成者、極めて精神性の高い幽玄美の複式夢幻能を完成させた天才的能作者・世阿弥の中にすら、梅原は縄文を見るわけであります。そしてまさにそのことに、時の権力者足利義満に引き立てられて一時期権勢をほしいままにする貴人に列しながらも、やがてはその関係性が破綻して佐渡に流されざるをえなかった世阿弥の運命の必然性を梅原は見取るのであります。縄文に秘められた悲しみが権力との蜜月を結局は破綻させずにいなかったというのが梅原猛の世阿弥解釈であります。自らの内に悲しみを抱えた人間が結局浮かばれないゆえんはその腹中に刺さったトゲにあるのでありましょう。キルケゴールの場合もそうでした。「秘すれば花」という世阿弥の言葉もまたそういった世阿弥の運命の中で梅原は聴き取るわけであります。「死して咲く」というのは何とも救いようのない悲しみというか、無念ないし怨念を感じさせる言葉ではありませんか。ここには自らが抱えるものに対する深い認識と諦念があります。未だ密かに燃えつつける怨念ともいうべき諦念があります。

ちなみに井筒は通常の能分類では三番能の鬘物のひとつとされています。晩年の能楽解説本（『能を観る』朝日新聞出版、2012年）においては、梅原も一応この分類を踏襲し、井筒を「人待つ女の哀しみ」の能として語っています。しかしこの能に対する梅原の想いはこれを「物狂い」の四番能あるいは「鬼」の五番能として見るという点にこそあったとわたしは記憶しています。事実梅原は若い頃は井筒を五番能として語っていました。そういった講義をわたしは何度か聴いたことがあります。帰らぬ夫をひたすら待ち、死んでしまう女という『伊勢物語』に題材を取ったといわれる井筒、それはそれとして悲しく美しい能です。そこには確かに哀れがあり、鬘物として三番能に位置づける解釈は間違っていないのかも知れません。しかしこの物語を複式夢幻能に仕立てた世阿弥の想いはもう少し深いところにあったのではと、わたしも思います。シテはなぜ亡霊でなければならないのか。亡霊というのは要するに成仏できない霊のことですから、すべからく怨霊です。井筒を鬘物として審美的に鑑賞される向きには上述の言説には違和感を持たれたかも知れませんが、井筒を五番能として語ったかつての梅原の見解にしたがって、ここでは井筒を怨霊論に引きつけて言及させていただきました。

§ 怨 霊

怨霊は梅原が生涯付き合ったテーマです。「怨霊」という観念にとり憑かれていた時期もあり、ある時期、祇園で「怨霊さん」といえば、梅原先生のことでした。

日本の神社は、梅原によれば、すべて怨霊鎮魂の社であり、その怨霊が、生前位の高い人のそれであればあるほど、またその死も陰謀や讒言などによる非業のものであればあるほど、その社は巨大化すると梅原はいいます。北の天満宮、上の御霊神社、下の御霊神社、愛宕神社などがそうであります。しかしあれらの神社だけでなく、京都はその種の社やパワー・スポットに充ち満ちています。そういったものは辻々に見られます。陰陽師安部晴明は今や人気観光キャラクターです。見廻せばわたしたちの周りにも怨霊はいます。むしろプチ怨霊だらけといって過言でないことを梅原は指摘します。お前はどうかといわれれば、否定できないかもしれませんが、ちっぽけで貧相な怨霊であるあたりが何とも悲しいというか、淋しいですね。同じ怨霊なら、もっと巨大な怨霊でありたかったものです。そうすれば社のひとつや二つは建っていたかも知れませんが。

シリーズ本『京都発見』（新潮社、1997年～2007年、全9冊）で梅原は魑魅魍魎や夜叉や怨霊が跋扈する都ならびに都近在の夜景を写し取りました。そういったスポットがあればどこにも各所にあるというのは、まったくもって驚きという外ありません。またその種の言い伝えが今もってあのように数多く語り継がれているというのも驚きであります。京都というところは何とも不気味なところで、あれを読めばとても夜の都大路を歩く気にはなれません。まさに妖怪や怨霊だらけです。また未だ消えぬ怨念に充ち満ちている。梅原は水木しげる氏と対談されたことがあったそうで、「あいつは妖怪を食ったが、わしは怨霊を食ったんや」と語っておられたのが思い出されます。怨霊に食われてしまうのではなく、怨霊すら食ってしまうあたりがいかにも梅原先生らしいところではあります。後年は陽気な怨霊に変貌されたといえるかも知れません。

§ 人類の哲学 — ギリシア哲学とエジプト文明 —

梅原は自らを「哲学者」と称します。もちろんその活動の広さから世上ではさまざまな公称を付して呼ばれていますが、自ら任ずるところはあくまでも「哲学者」であり、哲学者という自認は生涯変わることがありませんでした。たまたま大学で専攻した学問が哲学であったというようなことによることではないのであります。梅原が志したものはあくまでも哲学であり、西田哲学を勉強するために、東大法学部ではなく、京大の文学部を受けたのだと繰り返し語っていました。

梅原は「人類の哲学」を語ります。梅原にとって哲学は人類の哲学でなければなりません。言い換えれば、哲学は、梅原にとっては、ギリシア以降の2500年の西洋哲学に尽きるものであってはならないのであります。なぜか。それは梅原が田中美知太郎ゼミで落ちこぼれたからであります。もちろん「人類の哲学」というのは一般的構想ということもできますが、それを特に語らねばならない事情が梅原にあったのであります。

哲学がギリシア以降のそれである限り、梅原は田中ゼミの優等生、藤沢令夫の下位に立ちつづけねばなりません。藤沢令夫氏は田中美知太郎氏に協力して岩波の『プラトン全集』（全15巻）を完成させた日本屈指のギリシア古典学者であり、その業績は世に隠れがありませんが、そ

の業績が大きければ大きいほど、梅原もまた大きくあらねばならなかったし、海原が自らの人生をかけて志した哲学もまた大きくあらねばなりませんでした。哲学は、梅原にとっては人生そのものであり、これを他に譲ることなど断じてできないことでした。プラトンに対抗する気持ちもあったのでしょうか、梅原はヘラクレイトスの哲学をベースにして「闇のパトス」なる論文を書きましたが（1951年、梅原最初の論文）、出典が明記されていない、先行研究がまったく参照されていない、等々のことで、はなはだ不評でした。「闇のパトス」は、梅原としては、かなりの自信作で、その後の梅原の著述の原点にもなった論文でしたが、酷評されたわけでありまう。梅原の怒りは大きく、夜中にくやしさがこみ上げてきたのでしょうか、早朝、まだ空があけきらない払暁に、目を血走らせ、顔を引きつらせて友人の家に駆け込んだほどであります。夜中では迷惑になるからせめて夜が明けてから行きなさいと奥さまに諭されて払暁になったとのことあります。その友人の方は「梅原君は泣いていた」といっておられましたね。「君は hineinlegen（読み込み）過ぎる、哲学研究はまず auslegen（読み出し）しなければならない」と田中美知太郎氏にいわれたともいわれます。田中ゼミでの屈辱が梅原に「人類の哲学」を構想させるのであります。

しかし「人類の哲学」といっても、そんな哲学がそもそもあるのか。ギリシア以来の2500年の西洋哲学を越えるような哲学がどこに存在するのか。そう問われる向きも当然あるであります。「あった」と梅原はいいます。エジプトです。エジプト文明はギリシア文明に先行すること2500年の歴史を有しています。その5000年のエジプト文明を組み込まずしてどうして「哲学」といえるかというのが梅原の主張なのであります。エジプトは太陽の文明である、それに対してギリシアは水の文明であると梅原はいいます。太陽も水もいずれも生命にとっては欠かせないもので、どちらを欠いても人類は生き延びることができません。その太陽の思想を織り込んでいないような哲学がどうして「哲学」という偉大な名を自らに要求することができるかと、梅原はいうのであります。そういう意味で、梅原が若き哲学学徒とし一時期打ち込んだ20世紀最大の哲学者マルティン・ハイデガーの哲学ですら、梅原にとっては不十分なのであります。

兵隊から帰ってからも死の想念から逃れられなかった梅原は、若い頃、ハイデガーの『存在と時間』（Sein und Zeit）に跳びついたことがあります。そこでは現存在の実存の本来性として「死への存在」（Sein zum Tode）が語られていたからであります。そこにはとにかくも「死」が語られていた。それに梅原は惹きつけられたのであります。しかし、残念なことです。ハイデガーがその思想をそれ以上深めるということはなく、『存在と時間』は途中で断念され、未完に終わりました。ハイデガーはやがて『存在と時間』期の現象学的実存哲学から転向（ケーレ）して、形而上学期の紆余曲折の思索を経て、最終的に初期ギリシアの哲学にいたりました。初期ギリシアをハイデガーは「存在の故郷」（Heimat des Seins）として望郷し、晩年はアナクシマンドロスやヘラクレイトスやパルメニデスといった初期ギリシアの哲学者たちを「原初の思索家たち」（die anfänglichen Denker）と称揚し、彼らに深く傾倒しています。これらの哲学者たちの箴言は、ハイデガーにとっては、単なる人間の言葉ではありません。「存在の言」（die Sage des Seins）なのであります。存在からの通達なのであります。「われらは印である、解釈なしの」（Zeichen sind wir, deutungslos.）というヘルダーリンの詩句を晩年のハイデガーはよく口にしていますが（『思惟とは何の謂いか』、1951年～52年冬学期講

義)、この詩句の背後には「デルフォイの神託所の主なる神は、語ることも隠すこともせず、印を示す」というヘラクレイトスの断片B 93が響いています。ハイデガーも、その晩年は、もはや真理を追求する哲学者というよりは、ただアポロンから通告されてくる印を受け取り、それを伝えることだけが自分に課せられた使命であるというような自認にいたっていたのでしょうか。しかもそれに解釈を加えるということすらしないで (deutungslos)。

しかしそこまでです (当然のことながら)。梅原は5000年の哲学、否、それ以上の哲学を語らねばなりません。しかし5000年の哲学を語るといっても、これは、いうことは簡単ですが、なかなか大変な課題であると申し上げねばなりません。2013年に梅原は『人類哲学序説』(岩波新書)なる小著を出しました。もちろんそれでこの課題が片付いたということではありません。そのことは梅原自身がよく自覚していたことで、梅原は人生最後の仕事として「人類の哲学」を、なおもといいつづけていました。平成27年の3月でしたか、卒寿(90歳)のお祝いの会がホテル・グランヴィア京都でありました。そこでも梅原は「人類の哲学」を仕上げるためになお100歳まで、否、120歳まで生きねばならないと語っていたのが思い出されます。大変なことであります。みなさんはジョークと受け止められたようですが(笑いが漏れていました)、わたしは結構本気なのではと思いましたね。梅原は齡90歳にしてなお脱出しようともがいていたのでありましょう。これほどのトラウマを生むとは、京大というところは凄いとこですね。しかし、残念なことです、おそらくその想いを心中に抱いたまま、平成31年〔2019年〕の1月12日に梅原は鬼籍に入りました。わたしとしては、先生、もうよろしいからどうぞ放念してお休みくださいと申し上げずにおれません。

§ 回顧と展望 (梅原哲学の存在史的意味 — 西洋2500年の哲学の視座から —)

弥生に対する縄文、稲作農耕文化に対する狩猟採集文化、アイヌと沖縄、天っ神に対する国っ神、神々の流竄、天皇家の出自を問う日向神話、日本を捏造した男・藤原不比等、近代科学技術文明に対する森の思想、原発と文明災、ギルガメシュ叙事詩、人類の根源的記憶ともいうべき自然の循環思想、里人に対する山人、宮沢賢治と異界、悪人正機説に対する二種回向説、世阿弥と天台本覚学思想、敗者と怨霊、五番能としての井筒、ギリシア哲学に対するエジプト文明、人類の哲学、笑いの哲学。

梅原が生涯にわたって語ったこれらの諸概念は主観性 (Subjektivität) と存在 (Sein) の対立の別表現であり、その現象諸形態ということができるでありましょう。そしてこの主観性と存在という二大原理の対立と葛藤こそ、2500年の西洋形而上学に通底する対立と葛藤だったのであります。「西洋形而上学」 (die abendländische Metaphysik) の根底において戦われてきたものの、それは「主観性と存在の戦い」であり、それをプラトンは「存在をめぐる巨人闘争」

(γίγαντομαχία περί της ουσίας) (『ソピステス』 246 A) と呼んでいます。プラトンは哲学の中で理念的世界をはじめて立ち上がらせた主観性の哲学者ですが、哲学の根底においてなされているストライトが何であるか、よく分かっていたのでありましょう。その「存在をめぐる巨人闘争」はプラトン哲学と世俗的プラトニズムであるキリスト教の合体 (いわゆるプラトニズムとヘブライズムの合体) によって主観性原理 (Subjektivität) の勝利するところとなり、そのことによってハイデガーのいう「主観性の形而上学」 (die Metaphysik der Subjektivität) がヨー

ロッパ2000年の哲学そのものとなりました。主観性の内的構造である超越の構造が極端な形で現れた世界が中世世界ですが、近・現代世界もその同じ構造の中にあります。しかもその構造の過激化した現場がわたしたちの生きる後期近代世界なのであります。近・現代世界も、大方の歴史家の予想には反するかも知れませんが、原理的には中世世界の延長線上にあるわけであります。そしてその現象形態が今日の世界の実相そのものであるゲステル（Gestell）であります。今日知の世界を支配する科学は主観性の哲学である西洋形而上学の孫です。

しかし主観性原理の世界支配によっても存在（Sein）が完全に鎮圧され、駆逐されたわけでは決してありません。そもそも存在は鎮圧されることの不可能な原理なのであります。存在も縄文も決して鎮圧・駆逐されません。縄文にしろ、存在にしろ、それらはただ隠蔽され、潜在化しただけに過ぎません。たとえ隠蔽され、潜在化したとしても、存在は、存在である以上、必ず立ち現れてきます。事実わたしたちは、西洋形而上学の全歴史において、存在の現出、根源層からの存在のリアクションを何度も目にするのであります。中世期の全期間にわたってキリスト教世界を脅かしつづけた神秘主義や異端思想、近世の初頭における魔術や錬金術の再勃興もそういった潜在的存在の立ち現れということができるでありましょう。フーコーはこの問題をロゴン〔合理〕とアロゴン〔非合理〕の対立抗争としてルネッサンス期から古典時代いたるその動向を問いましたが（M.フーコー『狂気の歴史』）、どのような弾圧をもってしても根絶されず、繰り返し現れてくる新興宗教やカルト教団も根源層からの近代世界における立ち現れということができるかも知れません。ユングは存在のそういった側面に深く通暁する心理学者でした。否、むしろ深層の哲学者だったというべきでしょうか。

梅原猛もまたゲステルとして立ち上がった近代世界におけるそういった存在のリアクションのひとつということができると思います。梅原の根底において作動していたもの、それは主観性原理（Subjektivität）に対する存在（Sein）からのリアクションなのであります。あるいは根源的な存在が梅原猛という個体を通して噴出してきて、主観性のイデオロギーとその文明に猛烈に反撥していたといった方が正確かも知れません。梅原猛は主観性原理によって毀損ないし隠蔽されつづけてきた存在の近代世界における生起なのであります。梅原猛は歴史的な生起であって、西洋形而上学の歴史の中でしか起こりえない現象なのであります。梅原哲学は、その現象形態はどうであれ、日本思想に尽きるものではありません。梅原猛は西洋形而上学の葛藤の中に立つ哲学者なのであります。否、むしろ梅原哲学はヨーロッパ2000年の形而上学とその帰結である西洋近代哲学との対決ともいうべき哲学だったのであります。2500年の西洋形而上学の根源的動向の中で見ない限り、「梅原猛」という現象の本質は捉えられないでありましょう。単なる「異端の文明批判家」でしかないものにとどまってしまうでありましょう。上山春平氏は梅原猛を「異端の哲学者」と呼んでおられましたが、梅原が異端であったかどうかは難しい問題です。先にも申し上げましたが、梅原猛は西洋哲学のもう一方の系譜（存在の哲学の系譜）に属する哲学者なのであります。「存在の哲学の系譜」が異端の系譜であるなら、梅原猛は間違いなく「異端の哲学者」と呼ばれねばならないでありましょう。しかしこれを異端とするのは近代の主観性のイデオロギーによる偏見と独断でしかなく、わたしはむしろ「存在の哲学の系譜」こそ、人類の哲学という観点から見れば、正統系譜であると申し上げたい。

司会

梅原猛という圧倒的な「存在」が、私たちの中を突き抜けていったようなお話でした。日下部先生、どうもありがとうございました。

■座談会「『人類哲学』とは何か」

司会

それでは第2部を始めたいと思います。

第2部は、「人類哲学とは何か」と題した座談会です。

先ほどの日下部先生の講演にありましたように、さまざまなテーマに取り組んだ末に、晩年の梅原猛は、これからは東洋西洋の枠を超えた「人類の哲学」が必要だと語り、2013年に『人類哲学序説』という本を発表しました。その2年前に発生した東日本大震災の影響も非常に大きかったと聞きます。そして「人類哲学」の本編を書き始めましたが未完のままにこの世を去ったという次第です。

この梅原の意思を引き継ぐ形で、このたび梅原猛人類哲学賞が創設されましたが、第2部は、この賞の選考委員のみなさまによる座談会「人類哲学とは何か」と題して進めたいと思います。座談会の進行は、京都大学准教授の小西賢吾先生にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

小西

みなさまこんにちは。京都大学の小西と申します。座談会の司会・モデレーターを仰せつかりました。よろしくお願いいたします。

さて、先ほど日下部先生のお話がありましたが、休憩を挟んだとはいえ、みなさま、どのようなお気持ちでしょうか。いろんな形で心を揺さぶられているのではないかと思います。

私は正直非常にワクワクしているんですけども、その一方で、何というか、おそろしい気持ちがいたしました。このおそろしさというのは「恐怖」ではなくて、畏敬の念の「畏」です。つまり、先ほどのお話は、私の奥底にある何らかの存在を揺さぶった。

少しでも自己紹介する時間を与えていただければ、私は人類学者として、チベットや日本のフィールドで、先ほどのお話のにあった「存在に触れる」ようなことをしておりますけれども、まさにそういう経験ともあいまって、深く揺さぶられるものがありました。

最初の梅原代表理事のごあいさつで、「梅原猛は風である」というたとえがございました。風というのは、目には認識できませんけれども、それでも人間を動かし、前に進めていく力のようなものと私は考えております。そしてその風が、世代的には何十年も離れたしんめいさんを動

かして、その一部を受け継いだ著作を書かせた。

そしてこの人類哲学賞というのは、その風をさらに世の中に広げて、より下の世代に広めていく取り組みではないかと私は考えております。

今日はこれから選考委員の先生方にお話しいただくわけですが、お一人お一人に1時間以上お話を伺いたい方々なんですけれども、時間の制限がございますので、5分から10分ということをお願いをいたしております。そして、それぞれの委員の先生に2つお伺いしたいことを考えております。1つは人類哲学とは何か。もう1つは梅原猛人類哲学賞とは何か。それにとどまらず、パトスの赴くままにお話しいただければと思っております。みなさま拍手をもって先生方をお迎えしたいと思います。

それでは最初に、この賞を主催する梅原記念財団の梅原賢一郎代表理事からお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

◎梅原賢一郎スピーチ

今日は「梅原猛人類哲学賞」の選考委員のみなさまに集まっております。

のちほど、各審査員の先生方から、賞にたいする考えとか、思いとかを語っていただくことになるかと思っておりますけれども、まず、最初に、主催者の私のほうから、「梅原猛人類哲学賞」とは何か、そのねらうところとか、そういうようなことを簡単にお話させていただこうと思います。

「人類哲学」とは何か

「梅原猛人類哲学賞」ですが、この名称のなかに、ちょっと聞きなれない言葉がありますね。もちろん「人類哲学」という言葉です。梅原猛は、晩年、87歳のときに、『人類哲学序説』という本を上梓しました。

では、「人類哲学」とは何かということですが、端的に言えば、「ビヨンド・フィロソフィー」「哲学を超えて」ということだと思います。

哲学はphilosophyの訳語です。ギリシャ語のフィロソフィアに由来します。原語の意味からしますと、「知を愛する」ということです。そういわれても、ピンとこないかもしれませんが、端的に言えば、「論理（ロゴス）的な言語でもってものごとを徹底的に考える」ことです。「在るとはどういうことか」「なにを為すべきか」「なにを知ることができるか」など、哲学的な根本問題はもとより、日常の事象にいたるまで、論理的に、あれやこれやと、考えることです。そのような〈知の営為〉は、古代ギリシアにはじまり、ヨーロッパにおいて、現代にいたるまで、連綿とつづいているということが出来ます。

さきほどの日下部先生のお話のなかに、ソクラテスが出てきましたけれども、たとえば、ソクラテスです。ソクラテス自身は書物を残していませんので、プラトンの対話篇をとおして、ソクラテスの言動を知ることができるわけですが、ソクラテスは対話者を呼び止めて、徹底的に問い詰める。対話者が返した答えに問いを重ね、しまいには、対話者にむしろ同情してしまいたくなるほどに、しつこく、問い詰める。また、中世は「神の時代」といいますけれども、しかし、

哲学的な姿勢というのは、変わりません。たとえば、アウグスティヌスの書物なんかを読みますと、神は何なのか、神ははどこにいるのか、全知全能の神が世界を創造したのに、世界に悪があるのはなぜなのかなど、徹底的に問います。「何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」という西行の歌がありますけれども、そのような歌に馴染んだものにとっては、アウグスティヌスを最初に読んだとき、どうしてそんなに問い詰めるんだと、違和感をおぼえたほどでした。と同時に、ロゴスの凄さみたいなものを感じました。近代においても、デカルトの『方法序説』なんか読みますと、徹底的に疑って、問い詰める。そういう「論理（ロゴス）的な言語でもってものごとを徹底的に考える」ということは、ヨーロッパに固有な哲学的な〈知の営為〉ということができます。

そして、そのような〈知の営為〉の真っ只中で、自然科学が発展し、さまざまな有効な社会制度や法が考案され、いま、人工知能が世間の話題をさらっていることはいうまでもありません。

「知のOS」—二分法的思考の行き詰まり

さて、そのような哲学的な〈知の営為〉は、現在、世界標準の〈知のOS〉になっているということができます。OSというのは、オペレーティング・システムです。つまり、さまざまな知的な活動を根底から動かしている「知の体系」「知の枠組み」ということです。それは、日本においても、もちろん、支配的です。

大学で学んで、なにか成果物を提出するときには、論文という形式をとらなければなりません。そこでの言語は、いうまでもなく、ロゴス的な言語です。ポエムの言語をつかうことも、ファンタジーの言語をつかうこともできません。アナロジーの思考というのも、禁止されています。

知的な領域を動かしているのは、哲学を精髓とする〈知のOS〉であり、それは、世界標準であり、極東の日本にまでおよんでいます。

そのことは、全面的にいいことではないか、生活が便利になり、寿命も延び、素晴らしいことではないか、という人も多いと思います。ただ、たいていの人は、そのような〈知のOS〉の存在すら意識することなく、日々の日常をあたりまえのようにしてやり過ごしていくだけではないでしょうか。

しかし、どうも、この〈OS〉ではうまくいかなくなってきた、それが、今日の状況ではないかと思われます。環境破壊とか格差社会の問題です。ただ、そのような大問題ではなく、私は、あえて、ここで、20歳のころ、はじめての海外旅行での小さな体験のことをお話したいと思います。

飛行機に搭乗し、しばらくして、飲み物のサービスが始まります。「coffee or tea?」、海外旅行が初心者わたしにとって、まるで尋問をうけているかのようでありました。「どちらでもいいです。あなたにおまかせします」が正直な気持ちでありました。だから、どう答えていいのか、咄嗟の判断ができずにとまどっていますと、CAさんはいだちはじめ、さきよりも強い調子で尋問を畳みかけてきました。「coffee」と小さくつぶやくしかありませんでした。負け犬のような気分でした。

どうして二つのうちの一つを選ばなければならないのか。「あなたにおまけおまかせしま

す」とか「どちらでもいいです」といってはだめなのか。もし、そんなことをいったら、C Aさんは怪訝な顔をして、素通りしていったでしょう。

わたしは、「あなたにおまけおまかせします」とか「どちらでもいいです」とかの選択肢もあったほうが、厚みのあるコミュニケーションができるようになるのではないかと思います。「coffee or tea?」は、人間の主体的な意志をもっぱら問います。しかし、「あなたにおまけおまかせします」とか「どちらでもいいです」は、相手への信頼を含意します。いまの支配的な〈OS〉は、AかBか、正義か敵かを峻別し、厳しい二者択一を強います。「AでもないBでもない」とか「AでもありBでもある」というような、そんな緩慢なもののありようもあっていいのではないのでしょうか。

「知のOS」に潜在する人間中心主義

この支配的な〈知のOS〉のどこに問題があるのか、梅原猛ならば、そこには、人間中心主義が潜んでいるというでしょう。さっきの日下部先生のお話ですと、「存在忘却」、世界を「人間の主観的な認識」に変えてしまったということだと思います。

哲学とは、「論理（ロゴス）的な言語でもってものごとを徹底的に考える」といいましたが、そのような特権的な能力をもっているのは、人間だけと思われまゝ。「神の似姿」、理性をもった人間だけということです。ですから、煎じ詰めれば、世界は人間のための世界ということになってしまいます。

梅原猛はそこに大きな問題があると考えました。そこに潜む人間中心主義。「人類哲学」は、その意味で、「ビヨンド・フィロソフィー」でなければなりません。

ヨーロッパ哲学の周辺から

もっとも、「ビヨンド・フィロソフィー」といっても、さまざまな切り口があると思われまゝ。

一つは、ヨーロッパ哲学の周辺からということです。いまの支配的な〈知のOS〉、つまり、大学や病院や行政機関や公的な施設において、動作している〈知のOS〉は、端的に言えば、デカルト的なOSということができると思いますが、それが、たとえば、スピノザのOSだったらどうなっていたのだろうかとか、ライプニッツのOSだったらどうなっていたのだろうかというような議論も可能です。そのように、ヨーロッパの周辺から、ヨーロッパ哲学のいわば余白から、あらたな哲学を模索する切り口です。

梅原猛も、初期の段階、そういうようなことに悪戦苦闘していました。最初に手をつけたのはニーチェやハイデガーでした。ヨーロッパ哲学にたいする鋭い批判をくわえるニーチェにハイデガー、そういう哲学者に、まず、共感したわけです。

それとはべつに、感情の研究に着手しました。感情のなかでも、とくに「笑い」の研究です。ヨーロッパにも、ベルグソンなど、すぐれた笑いの研究はあるけれども、認識の研究に比して、感情の研究はそれほどなされていない、自分がやるんだというすごい意欲に満ちた論文がいくつかあります。戦後の実存の闇から、みずからを救い出そうとしたのかもしれませぬ。それら

は、だいたい、『笑いの構造』に所収されています。そこにおいて、「感情の記号論」というような、梅原猛の意外な一面を見ることもあるかもしれません。

東洋思想

それから、東洋思想です。乱暴に言えば、西洋がだめなら、東洋に振ってみようということです。さっき、冒頭の挨拶のところでふれましたけれども、梅原猛の師匠、山内得立は、傘寿をすぎて、『ロゴスとレンマ』という大著をものにしました。

これは、画期的な著作ではないかと思います。オーギュスタン・ベルクという学者が注目して、フランス語にも訳されているようです。また、中沢新一さんとか木岡伸夫さんとか、そこからインスピレーションをうけて、それぞれ、本を書いています。山内は、『ロゴスとレンマ』において、西洋の〈ロゴスの論理〉と東洋の〈レンマの理法〉を対比的に提起しました。

では、〈レンマの理法〉とは何かということですが、〈ロゴスの論理〉が「Aである」か「非Aである」の二つのもののありようしか許容しないとすれば、「頭でわかる」のではなく、身体的な「捉える」とか「握る」というニュアンスをもつ、ギリシア語の動詞（ランバノー）に由来する、〈レンマの理法〉は、「Aである」「非Aである」のほかに、「Aでもなく非Aでもない」「Aでもあり非Aでもある」というもののありようを容認します。つまり、もののありようは、「Aである」か「非Aである」か「Aでもなく非Aでもない」か「Aでもあり非Aでもある」の四つあることになります（それを、「テトラ・レンマ」、「四つのレンマ」といいます）。

この山内によるレンマの提起の射程（可能性）がどこまでとどくのか定かではありませんが、すくなくとも、「正義か敵か」というような、硬直した（また、排他的な）二分法を脱することができます（ちなみに、わたしは、『ロゴスとレンマ』を読んだとき、はじめての海外旅行から何十年もたっていましたが、そう、そのとき、「借り」を返した思いがしたのです。あのときのわたしは負け犬ではなかった。「どちらでもいいです。あなたにおまかせします」。わたしは溜飲を下げたのです）。

ところで、梅原猛にもどりますが、山内得立の「レンマ」とのつながりでいえば、直接的には関係がないように思われます。むしろ、ここで、とりあげるべきは、つぎの二つのキーワードです。

一つは、「自然生命的存在論」です。このワードは、初期の作品、『美と宗教』において、すでに、登場します。これは、直接的には、空海思想にたいして、そのように概念づけたものです。森羅万象は、なべて、たんなる物質ではない。生命として、みな、輝いている。すなわち、仏性をもつ。ただ、梅原猛はこれをもっぱら仏教思想の範囲内で主張しているのではありません。仏教が移入される以前のアニミズムに基づけようとします。だから、「自然生命的存在論」はアニミズムの仏教的な翻案ということにもなります。

つぎに、「往相廻向・還相廻向」です。梅原猛は、晩年、親鸞の研究にいそしみ、「往相廻向・還相廻向」にたどりつきます。親鸞の思想といえば、『歎異抄』の「悪人正機説」を挙げるむきもあるかもしれませんが、梅原猛は、親鸞の中心的な思想は、あくまでも、『教行信証』の「往相廻向・還相廻向」、とくに、「還相廻向」の思想にあると主張します。それは、端的に

いえば、浄土に往生して、ふたたび、この世へともどって、利他行をするという思想です。梅原猛は、ここにおいても、仏教が移入される以前からの「あの世観」に基づけようとしています

文明史から

最近、哲学者の納富信留さんが「世界哲学」というのを提唱されています。それは、雑ぱくにいえば、西洋哲学中心主義を批判し、哲学をもっと広くとらえようという試みということができると思います。「アフリカ哲学」も「日本哲学」もありということになります。

また、哲学の担い手にも、鋭く、批判の目をむけています。アカデミアの「哲学研究者」のみが担い手ではない。本来、哲学者はももっと実践的であった。しかし、こんにち、哲学者と称される多くの研究者は、コロナ禍という危機にあっても、「深刻な世界の問題には向き合わず、学術の枠内でゲームのように研究を続けている」ように見受けられる。ここからは、「哲学者像」の刷新のようなことがうかがえます。

梅原猛の「人類哲学」は「世界哲学」と重なる点があるかと思います。しかし、異なる点もあるかと思います。

梅原猛は、支配的な〈知のOS〉を見直すさいに、文明史的な観点から問いただすという側面があります。つまり、さきに述べたような、人間の認識主観に依拠する〈知のOS〉が成立したのは、農業が広汎におこなわれるようになったところであると。そうだとしますと、その原点に立ち戻って、農業以前はどうであったのか、つまり、狩猟採集の生活をしていた人たちはどうであったのかということになります。ここで、「狩猟採集民の哲学」というような地平が開けることになります（そして、アイヌとか縄文とかに着目しました）。また、梅原猛は、農業といっても、稲作農業と小麦農業のちがいを強調します。つまり、稲作農業は狩猟採集と親和性があったと。「森の文明」とか「森の思想」とかいうのも、そのような文脈からです。

生命哲学

それから、最後の切り口は、「生命」という観点からの切り口です。人間中心主義ではだめだ、動物の生命とか植物の生命、あるいは、生命そのものの観点から、考え直す必要がある。梅原猛は、「草木国土悉皆成仏」という言葉をよくつかいました。それは、能の詞章によく登場する言葉です。梅原猛は、仏教という枠組みを越えて、「生命哲学」として語っているように思います。

梅原人類哲学

以上、「人類哲学」にはいろいろな切り口があると思います。その切り口はバラバラにあるのではないでしょう。空海的な表現を用いれば、たがいに、融通無碍に、融け合っているというようなことでしょう。

そして、「ビヨンド・フィロソフィー」である「人類哲学」においては、いうまでもなく、ロゴス的な言語だけが有効なのではありません。直観的な把握であるとか、感性であるとか、想像力であるとか、アナロジーの思考とか、メタファーによる表現であるとか、そこでは、あらゆる

る能力が試されます。いやしくも、ロゴス的な言語による成果物だけが問題ではありません。なんらかのパフォーマンスであっても、なんらかの音響物であっても、なんらかの造形物であっても、立派な「哲学」になりえます。

ですから、「梅原猛人類哲学賞」ですが、芸術や学術の幅広い領域から選考したいと思っています。そして、ここにお並びの先生方を、私なりに、選ばせていただきました。審査委員の先生方の喧々譁々の議論のなかから、毎年一人、選んでいただければと思っています。よろしくお願いいたします。

小西

どうもありがとうございました。それでは続きまして、選考委員の先生方からのお話に移ります。まずは奥野克巳先生、どうぞよろしくお願いいたします。

◎奥野克巳スピーチ

「梅原猛を継ぐ人類哲学とは何か」

私は「梅原猛を継ぐ人類哲学とは何か」というお話をさせていただきます。

どういうふう考えたのかというと、よく知られているように、梅原猛先生には肉声のCDがたくさんあるんです。そのうち、2015年に刊行された、梅原が「わが人生を語る」と題した12巻のCDシリーズがありまして、それを今回改めて全て聞きました。その中から、私たちが継ぐべき人類哲学とは何かということについて考えてみようと思います。

そのCDシリーズのうち、出生から大学時代までが第4巻までです。

その後、研究と社会活動歴が語られ、最後の第12巻のタイトルが「人類哲学序説」となっていて、それには「人類が生き延びるために」というサブタイトルがついています。

ここでは、その12巻の内容を振り返って、梅原猛が私たちに残した課題について、改めて考えてみたいと思っています。

このCDは1巻50分ぐらいの語りです。どういうふうに最初切り出しているのかというと、人生を振り返って、スーパー歌舞伎の作者になったとか、あるいは日文研、国際日本文化研究センターの創設に関わったことがあった。けれども、私の本質は哲学者だと宣言しています。そして、今後の人類がいかに生きるべきかを考え、その思想を体系として人類に提示することが哲学者の使命であると言っています。

日本の思想というのは、将来の人類にとって不可欠な思想が潜んでいるとも。それが「草木国土悉皆成仏」という天台本覚思想になるわけです。

草も木も動物や鉱物も生命を持ち、自然界の一切が成仏できるとする思想です。それは、縄文期に起源をもっている。さらにそののち、鎌倉仏教の共通前提となったと言っています。自然を征服する近代文明に対して、自然と共生する文明の原理としての「草木国土悉皆成仏」がいま再考されねばならないのです。

ギリシャ哲学からデカルトまで

哲学というと、これは一般に西洋哲学のことであるとされる。その点で、梅原はまず西洋哲学を一望します。出発点は、古代文明です。エジプトの稲作文明に対し、その後に、ギリシャ、あるいはユダヤの文明というのは牧畜を基盤として成立した。ギリシャとユダヤでは人間が動物を用いるため、人間中心の文明とならざるを得なかった。

ここで重要なことは何かというと、ギリシャやユダヤの思想を研究する際は、「産業的基盤」という言葉が使われていますけれども、まずは生業形態のありようから探っていくことが重要なんだと述べています。

まずは、ギリシャ哲学について。西洋哲学の祖であるプラトンの基礎にあるのはイデア論です。イデアというのは「ヌース」すなわち理性によって認識できるとされる。理性を持つ人間は他の動物より優れているとされる点に、人間中心主義がもうすでに現れている。

その次に、キリスト教の聖書の中には、人間は神の似姿であり、人間は動物に優っており、絶対的な支配権を持つのだと書かれている。これはプラトンの思想となんら変わらない。つまり、これもまた人間中心主義的な表明になっていると言うのです。

さらに次には、デカルトに行くわけですが、それでも、「われ」が世界の中心に置かれた。デカルトにとっては、われに対立する自然は、理性によって認識されるような世界であって、数学的な法則で理解できる。つまり、自然世界というのは、機械的な法則によって成立する無機的な世界なんです。そうなんだけれども、梅原は、これはおかしいと述べています。自然は生きているわけです。

つまり、梅原は、デカルトの方法論は評価するんだけど、デカルトの哲学は間違っていると言います。それには2つの理由がある。1つは世界の中心に人間を置いてしまったこと、それからもう1つは、対象世界を生きていないというふうにみなしたこと。この2点を問題で、間違っていると指摘しています。

しかしその後、デカルトの哲学を基礎として発展してきた近代文明は、人類に大きな恩恵をもたらしたわけです。私たちは、この近代文明に感謝しなければいけない。だけれども、その一方で、いまや急速な自然破壊が始まっているし、多くの動植物が絶滅に追いやられている。こういったことを西洋哲学がどのように考えたのかという話が次になされていくわけです。

ニーチェとハイデガー

まずニーチェが取り上げられます。

理性の哲学というのは万人に共通するものであるがゆえに、奴隷の哲学だ、弱者の哲学だというふう考えたニーチェは、それを打破して、強い意志を持つ「超人」による文明を築くべきだと唱えた。

また、キリスト教のように死後の永遠ではなくて、生（せい）、生きている世界で同じことが繰り返される「永劫回帰」を絶対肯定しなければいけない。こういうふうにと梅原は説きます。

ニーチェは、理性哲学の深層には意志があると暴いたけれども、これをハイデガーが批判しているわけです。ハイデガーは、ニーチェはまた理性による世界支配という点で、理性主義とな

んら変わらない。ハイデガーはニーチェをこういうふうに批判したと梅原は述べています。

ハイデガーはプラトン以来忘却されてきた「存在」への回帰を唱えて、人間中心主義を批判した。そこで核爆弾を例に挙げて、原子力こそ理性の絶対支配と人間の意志による必然支配の象徴だと断罪し、このままでは人類は破滅すると警告したのだとも述べてます。

ただ、ハイデガーは、シュヴァルツヴァルトの森がひそかに「存在」を語っているというふう

に説きつつ、言葉は人間だけが語りうるものであって、「存在」は言葉によってしか現れないとするなら、ハイデガーにも、プラトン以来の人間中心主義的な理性主義が残っている。そう梅原はハイデガーを批判します。続けて梅原は、こんな言い方をします。ハイデガーの哲学は実践的な効果に乏しいのだけれども、それに対して「草木国土悉皆成仏」の思想は、実践的な可能性を持つと。

われわれはいま人類の向かうべき方向を改めて、自然を支配する文明から自然と共存する文明へと変わらねばならない。人間中心主義を乗り越えて、動物のみならず植物や鉱物とも人間が共存できる世界観を確立しなければいけない。こういう力強い言葉が、そこでは聞かれます。

日本には、縄文文明を基礎文明としながら、この考え方が残っていたんだ。梅原は、そう述べています。縄文文明というのは1万5000年も続いたものですが、その背後には、何十万年に及ぶ狩猟採集の文明がある。だから縄文文明というのは狩猟採集文明の一端だと言えよう。そうした文明へと立ち返って考えなければ、今後、人類は持続できないだろうと述べています。

書かれていない本説こそ引き継ぐべき課題

2015年にこのCDが出て、『人類哲学序説』が出たのが2013年ですので、たぶん、このCDは、本が出た直後あたりに録音されたものだと思います。そんな前後関係です。そして、梅原は言っています。『人類哲学序説』というのはあくまで「序説」だと。まずは、西洋の哲学を、つまり、プラトン、デカルト、ニーチェ、ハイデガー、その他スピノザ等々を含めて、検討しなければならない。けれども、先に述べられたその検討はまだ序論段階にとどまっていて、本論はこれから書かれねばならない。梅原は、そういうふうに指摘します。

この書かれていない本説こそ、私たちが引き継ぐべき課題だということです。西洋の理性主義のもとに生まれた人間中心主義を乗り越えて、「草木国土悉皆成仏」の思想へといかに立ち帰って、今後それを実現していくことができるのか。その問いを私たち一人一人に向けることこそが、梅原猛を継ぐということなのではないか。梅原猛を継いで、人類が哲学をやっていくとは、そういうことなのだろうと思います。

以上、私のプレゼンテーションを終了いたします。

小西

ありがとうございました。

次は鷺田清一先生にお話しいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

◎鷺田清一スピーチ

梅原猛を引き継ぐもの

みなさんこんにちは。

私はプレゼンテーションという、きちんとしたお話というよりも、むしろ少し思ひ出話をしてから、梅原猛を引き継ぐものって何なのかってことをお話しできたらと思っています。

たぶんまだどこにも書かれてないエピソードだと思うんですが、私の哲学の先輩が大学院生のときに、10歳ほど年上の先輩である梅原さんのお宅に行って、いろいろ悩みごとの相談をしたそうなんです。個人的な話なのか、哲学の話なのか、その中身は聞きそびれたんですけど。

そしたら、和室でこたつで梅原さんが座ってらして、ここに哲学の先輩が座って、こっちにテレビがありまして、彼が一生懸命悩みごとを相談してしゃべっていると、いろいろ助言くださるんだけど、目は完全にテレビのほうに行ってるんですね。で、何かというと、大相撲の中継をやってるんです。梅原先生はお相撲がお好きなんですね。

ところが、そこで済まなくて、じつはその間も手が動いている。そう、原稿を書いてらしたんです。

後輩の悩み相談に向き合いつつ、テレビを見つめつつ、しっかり原稿を書いてらした。まるで聖徳太子みたいだったと、懐かしそうに話されたことがあるんです。

学問の前ではみな平等

私は若いころ梅原さんとは接点がありませんでしたが、よく似た経験はしたことがあります。ルネサンスから18世紀の哲学を文学部で講じてらした野田又夫先生のお家に行ったときのことなんですが、別に先生に用事があったんじゃないくて、息子さんが大学のクラブで一緒だったんですね。で、クラブの集まりに来ないんで、どうしてんだろうと思って、ちょっと当時は——今もそうかな——暇ですから、その野田くんところに行ってピンポンと鳴らしたら、先生が出てこられたんです。

私は20歳でまだ3年生になったばかり、哲学科に入ったばかりだったので、野田先生は40歳ほど年上ですし、哲学史の大先生だったんですけど、「野田君、おられますか？」って言ったら、「いないけれど、君は息子の友達かね」とかいろいろと聞かれて、「はい」って言って、「学部は？」とか言われて、だんだん問い詰められて、哲学科の3年生ということを言わざるを得なくなったら、ニコッと嬉しそうな顔をされて、書斎に通してくださったんです。

初対面の20歳の小僧を書斎に通してくださって、それから1時間、帰る直前まで、『アベラールとエロイズ』という恋人たちの新しく出た伝記がすごい面白くて、今までにないこんな挿話があるとかいうのを1時間にわたって、犬ころみみたいな若造に、一生懸命話してくださるんですよ。もうびっくりして。話の中身は全然覚えてないんですけども、そのときしみじみ思ったのは、大学っていうところで学問をする人っていうのは、先生も学生もないんだな。みんな学問の前では平等なんだなということです。梅原さんは私の先輩に対して聞いてあげるほうの立場だったけれども、逆にこの先生は、夢中で話してくださった。

こんなすごいことが見つかったんだとか、こんな面白いことがあったんだということを、一生懸命しゃべってくださって、もうほんとうに、学問ってすごいなって、そのときに初めて思いました。

失われた学問の熱情

野田先生はデカルトとカルネッサンス関連の研究で高名な先生ですが、実は卒業論文はカントの道德哲学なんです。そして、人生最後の哲学の講義はヒュームというイギリスの哲学者の、しかもヒュームを研究する哲学系の人がほとんど読まない、イングランド史という歴史書についての話をなさった。大学をリタイアする年に、もう次の新しい課題に向き合っておられた。学問ってすごいものだなっていう体験をさせてもらったのも有り難い思い出です。これを知り尽くさないと死んでも死に切れない、そんな凄い熱情が学問に溢れていた時代なんですね。

それさえ持っていれば、相手が学生であれ高校生であれ、大先輩であれ先生であれ、全部平等だという思いです。だから学問の世界では先生と呼ばれるのは大したことない。呼び捨てされるとというのが、評価が高い証しだった。「梅原は」とか「梅原と梅棹とは違う」というような感じで、偉そうに20歳のときでも話していました。

いま、大学という学問の場所から知らない間に失われてしまったのが、そういう徹底した平等とか熱情、もしくは猛々しさではないかと思うんですね。

シラバスより野生の教育

その象徴が、例えば大学が法人化してから、教育の場面でシラバスを15回分、シラバスというか授業の内容、1回目はこれをして、2回目はこれをして、3回目は……、それを15回書かないとダメというものです。

また、学生が授業の評価をして、この先生の授業はいいとか悪いとか。そんなの本末転倒もいところだと私は思っていて、良い授業というのは、はじめはさっぱりわからない授業なんです。「ええっ、こんな探究の領域ってあるの?!」とか、「物を問うのにこんな問い方ってあるの？」みたいに、わからないけれども、なんか凄そうっていうことから学問は始まるんです。自分のいまの頭の器で理解できるんだったら、それはスケールの小さい学問なんです。

シラバスもそうです。シラバスっていうのは、1時間目から15時間目まで予定通りやるっていうことでしょうか？ 予定通りやらないと、あの先生は途中で時間切れで、尻切れとんぼ、授業のマネジメントができてないと言われるんですけども、違うんです。いい先生は、まず自分が最初に何か伝えたら、そのときの反応を見て、「あ、これわかってないな、ちょっと驚かしてやろうか」とか、「次はこっち側からちょっとくすぐったほうが関心を持つかもしれない」というふうに、毎回次の授業はその授業を踏まえて、作戦を練ってやるんですよ。それが学生を愛するということなんですね。だから、学生の反応を見ないで予定通り15回やるのはダメな先生なんです。自分がそのシラバスに縛られてしまう。「シラバスにシバられてる」（笑い）。

だから私は、ふだんは梅原猛と呼び捨てで紹介していますが、梅原さんに体感させてもらったことは、学問の前、知の前では皆が徹底的に平等であるということと、野生の思考、飼いや

されないという意味で、野生の知性というものです。それを若い人には身につけてほしいと思います。

梅原さんの名前は「猛」ですけど、あの猛々しい、そういう相手が先生であっても、それはおかしいと思ったら、「それ違うんじゃないですか？」って言って、対等に、まるで友人同士で話のように話せる学問、そういう空気をしかと継いでいきたいなと思います。

ちなみに私は梅原さんが学長をされていた京都市立芸術大学で何代かあとに学長をさせていただいたんですが、梅原さんがいらっしゃった頃の先生方から聞いたんですが、当時はキャンパス内に野良犬がいたらしいです。で、みんなで食堂で食べたものの一部をあげて放し飼いで飼っていた。その犬の名前が「たけし」。(笑)

18歳のころ、「おい、たけし、腹減ったやろ」って言って、そういうことを大声で狭いキャンパスで言えるっていう雰囲気を作ったのも、野生の教育の、梅原さんがなさったことだと思うのです。以上です。

小西

驚田先生、どうもありがとうございました。

それでは続きまして、お隣の福岡伸一先生にお願いしたいと思います。

どうぞよろしくお願い致します。

◎福岡伸一スピーチ

怒りのエネルギー

みなさんこんにちは。生物学者の福岡伸一と申します。

梅原先生との思い出は、まずは私が京都大学に生物学を志して入った1980年前後のことだったと思うんです。

梅原先生が文化祭か何かの講演にいらっしゃってお話しされたときに、すでに法隆寺論とか『水底の歌』とかを私は読んでいたんで、梅原猛ってどんな人なのかなと思って聞きに行ったのが初めてなんです。

そしたら梅原先生は、まずものすごく東大を批判するんですよ。自分がなぜ仙台から東京を飛び越して京都に来たかっていうのを語って、東大の和辻哲郎なんか全然大したことないとか、それから、そのときおそらく京大にも恨みがあって、とにかくものすごい怒りのエネルギーで、だんだん話しているうちにブルブル震えながら、ものすごくなんかクレイジーな感じになって、すごいなこの人は、と思ったのが最初の出会いでした。

その後、日文研を作られたり、私もものを書くようになって、対談させていただいたり、時々交流することができたんです。

で、今回この梅原猛人類哲学賞の選考委員に、理科系の私が加わらせていただいた理由をつらつら考えますと、やっぱり梅原先生が非常に広い視点で、哲学のあり方を考えられていたからだ

なと思うんです。それは先ほど日本のヘラクレイトスたるクサカベクレス先生が、非常に広範に梅原先生の業績をまとめられたので、それを読んでいただくのが一番いいんですけども。

羅針盤を与えてくれる人類哲学

私が梅原先生が素晴らしいなと思ったのは、もういまから20年以上前ですけども、日本で「脳死は人の死か」という議論があったんですね。政府の諮問委員会、脳死臨調（「臨時脳死および臓器移植調査会」）というのができて、脳死を人の死と認めるかどうかを検討した。でももうすでに結論は決まっていて、脳死は人の死だと認める方向に全体としては議論が進んでいったわけなんです。

では、なぜ脳死を人の死と認めなければいけないのか。それは臓器移植を展開するためですよ。脳が死ねばそれは人の死であって、その身体はもう死体だから、たとえそれが脈打っていても、そこから臓器を取っても、それは殺人にはならないという、臓器移植を推進するために、人の死を前倒しにするというのが脳死の議論だったわけです。

梅原先生はその委員のひとりとして、脳死に大反対されたわけです。つまり、人類哲学っていうのがもしあるとしたらそれは何かというと、この科学万能の時代、あるいは医学がどんどん進んでいて、いまやAIがいろんなことをすべて教えてくれる時代にあっても、やっぱりわれわれがどちらの方向にどういうふうに進むべきかという羅針盤を与えてくれるのが人類哲学だ。人文知が、理科系の進み方も教えてくれる、そういう信念が梅原先生にはあったと思うんです。

生き生きとしたいのちがあるのが「存在」

梅原先生は、なぜ脳死が人間の死として認めがたいのかということを展開されたんです。それは今日、クサカベクレス先生がお話しされた、存在者と存在っていう問題に非常に密接に関わっているんですね。これはなかなか難しい議論なんですけれども、存在者＝ザイエндеと存在＝ザインというのは一体何なのか。

われわれ生物学者は、生物を「存在者」として見て研究しているんです。つまり、われわれは細胞からできていて、細胞はタンパク質からできていて、タンパク質の設計図はDNAであって、DNAの配列は解読すると読めるし、それを改変したり編集したりすることができる。というふうに、操作の対象として、物質として生命を見ると、それはいくらでも要素還元主義的に細かく分けられて、ミクロな、精妙なメカニズムがわかるんですけども、それはどこまで行っても生命を「存在者」として見ているわけです。

でも、ほんとうに生きているということはそういうことではなくて、「ザイン＝存在」として生き生きとしたいのちがあるっていうのが存在ですよ。

だから、生命を「存在者」として見れば脳死は認められるけれども、「存在」として見れば、脳が死んだだけで、その体が死んだとみなすことは非常に考えがたいということを、非常に鮮やかに、梅原先生は展開されたわけです。

ですから、梅原先生が亡きいま、このさらに科学万能時代、AI万能時代になって、われわれが一体どういうふうにこの世界を捉え、いのちを捉え、自然を捉えなければいけないかという、「存在者」として対象を見るのではなくて、「存在」として物事を考えなければいけない。

それが人類哲学の大事な部分だということで、私も梅原賞の選考委員のひとりとして、そういった梅原哲学を継承してくれる、遺髪を継いでくれるような活動をしている人たちを表彰していきたいなと考えているわけでございます。どうもありがとうございました。

小西

福岡先生、どうもありがとうございました。

それでは続きまして、長谷川祐子先生をお願いします。

◎長谷川祐子スピーチ

行動する哲学者

みなさん、こんにちは。

私は近現代美術史が専門で、キュレーターという仕事をしています。この3月まで金沢21世紀美術館の館長をしていました。いま京都大学客員教授として、キュレーション理論研究をしています。

また山極さん主宰の地球研（総合地球環境学研究所）で、客員として科学者の研究を視覚や聴覚などのセンソリーラーニングを通して展覧会や、ワークショップのプログラムを通して共有するための視覚プレゼンテーションや、体験のデザインを共同研究させていただいています。

今日、私はアートの専門家として参加させていただいていますが、梅原先生と1回だけお目にかかったことがあります。それは先生が、先ほど鷺田さんのお話にも出た、先生が京都市立芸術大学の学長をしていたときです。

私は東京藝大の学生でしたが、五美大祭が京都市立芸大でありまして、学内の広場の一角に先生が座っていらして、にこやかに学生たちと話をしていたらしゃいました。この方が学長さんなのだと最初は遠巻きに眺めていたのですが、気さくな雰囲気だったので、私もお挨拶しました。そのときどういうお話をしたかは覚えていないのですが、周囲にポジティブなエネルギーを発しておられて、みんながそこに寄っていきたくなるような、そういう感じの方でした。

その方が偉大な哲学者であり、『水底の歌』という日本論を通して、文学的な、あるいは新しく歴史を読み替えるというセンセーショナルな方法論で、1つの世界観をお見せになった。もう1つはスーパー歌舞伎等で、いままでの因習的なやり方を破壊するような、新しい歌舞伎の脚本を作られ、プロデュースに関わられたことを知って、梅原先生について、Thinker、考えると同時に動く、实际的に行動する哲学者というイメージを持ちました。

先ほどの講演でも言及された、近代の資本主義、あるいは現代の問題を解決する1つの方法としての草木国土悉皆成仏という考え方、人間もほかの草木も石もすべて同等であり、アニマを持っている—とにもあることによって、新しい脱人間中心的な世界を作る。それを出発点として、いま起こっている人新世をはじめとする様々な問題を回収していく1つのきっかけとなっていく。世界中の哲学者、思想家、科学者などの研究者が向かっている重要な考え方の方向です。

その流れを芸術家たちも非常に意識しています。

現在の問題を解決していく考えの起源、それを梅原先生が一つの中心となって、根本的な考え方を提示されたことに、私は芸術に関わる人間として深い思いを抱いています。

演じられる哲学になり得た

その中で、日本という国にありながら、先ほども日下部先生が、西洋の哲学を超えていくやり方、アニミズム的、多神教的な生命のパワー、土地のパワーをそこに盛り込んでいくやり方と、怨霊史観、怨霊という話をされました。梅原先生が、封じられたもの、いままで無視されてきたもの、そして歴史から忘れられてしまったもの、虐待されたもの、それが霊となって現れてくる様子に着目されて、歴史の見過ごされた影の部分に暴いていらっしゃる。結果、別の精神史を編むということをされたと思います。

もう1つは、芸術との融合ですね。スーパー歌舞伎や能に通じる劇場的創造力、そして先ほど存在という話が出ましたけれども、身体という存在に対して非常に深い意識と感覚を持っていたと思います。

先ほど私は日下部先生のパトスという言葉に圧倒されたのですが、私が梅原先生にお目にかかったときに感じた内在的エネルギーはそこから来ていたのかなと思います。そういう意味で、身体によってさまざまなものを乗り越えていく、いわゆる認識論ではなくて存在論への移行、これはいま重要な問題となっています。それらを、思想として語ることを超えて、思想が演じられることによって実現されていった。そういうふうにとらえています

ですので、哲学者が劇場のプロデュースをしているという話ではなく、その哲学的な語りがほんとうに演じられる哲学になり得たというふうな見方をすることもできると思います。それが新しい人類哲学に関わっていくことなのかなと思いました。

現代は梅原哲学が起源として求められている

先ほどの非人間中心的な世界観を作られたことの重要性のほか、もう1つは、行動する哲学者として、公共性や社会的変革への責任を伝えようとされる方だったと思います。憲法九条や原発の問題などに対して、非常に強い、毅然としたアクションを示されたということがありました。

すべてのものがあっちへなびいたとしても、自分だけはここにいるという立場を貫かれる。そういう意味での行動する哲学者という姿に強い印象を持っています。

私は最近（2024 11月から2025年3月）金沢21世紀美術館でアートとエコロジーをテーマとした展覧会を企画しました。そこに地球研とともに参加してくださった山極先生が、シンポジウムに来てくださいました。そのときに一緒にお話しされたティモシー・モートンさん、この方はエコロジー論に新たな視座をもたらした哲学者です。モートンはハイパーオブジェクトを含めてモノすべてが重要な主体として相互に関係をもつと論じています。人間だけではなく、情報も含めた新たな物質性に目をむける、私たちの周りを取り囲むアンビエンス、空気、雰囲気などを感じ取るセンサーを鋭くすることで関係性への感度をあげることを言っています。

また、行動する、歩くという行為を通して世界を知ること、1つの哲学を作られた社会人類

学者のティム・インゴルド、この方もいままでの哲学者とは異なった形で、私たちが行動すること、そしてそれが環境と関わっていることについての知見を述べられています。

もう1人、哲学者エマニエーレ・コッチャ、この方は（ジョルジョ・）アガンベンの弟子なのですが、その方は14歳ぐらいときに、農園学校に入学し、農業や、ガーデニングをしながら植物に接していらした。彼も『植物の生の哲学』という本を通して、彼らの（植物）の知性や主体性について語っています。これらの、私が出会った方々、今世界の見方をかえようとしている専門家たちは、梅原先生の思想の同じ方向をむいていると感じました。

その方たちは梅原先生と同様に、芸術文化を通して、ご自分たちの哲学を人々に語ろうとしている。そういうことも含めて、私はこの賞の審査員の一人として、自然と人間の関係の大きな流れ、芸術と哲学の関係について梅原哲学の重要性を皆様と一緒に考えていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

小西

長谷川先生、ありがとうございました。それでは最後に、この賞の選考委員長である山極壽一先生からお願いいたします。

◎山極壽一スピーチ

言葉の前に物語があった

みなさんこんにちは。

私は人間ではなくて、人間に近いサルやゴリラの研究をしている者ですけれども、今日の日下部先生のお話を聞いて、梅原さん、やっぱり晩年そういう境地に達したんだなという気がしました。

というのは、西洋文明っていうのはやっぱり最初に言葉ができたと見なす、キリスト教が非常に強いんですよね。言葉っていうものが人間と動物を分ける。言葉がない動物は人間以下の存在だとずっと言ってきたわけです。聖書にも掲げてある。言葉は神であるということを信じておられるキリスト教の方が多いと思うんだけど、ユダヤ教もそうですよね。

だけど、言葉ってそんなに昔から人間が使っていたわけではなくて、チンパンジーとの共通祖先から分かれて700万年の間、たった1パーセントぐらいの期間しか言葉を使ってないんですよ。だから言葉の前に物語があったと私は思っています。先ほどギルガメシュの話が出てきましたけれども、あれは物語ですよ。言葉でつづられているわけだけど、それ以前に似たような物語が出てきたんじゃないのか。

縄文以前からずっと狩猟採集生活が続いていたわけだから、その暮らしというものがわれわれの体や心にどういう影響をもたらしたんだろうって、これは歴史に残ってないからわかんないわけですよ。だけど、そこは人間性を考える上で本当は重要なところなんじゃないかと思います。

世界を疑うこと、直観、気づき

実は、今回、『人類哲学序説』を読んでみたんだけど、デカルトのことが書いてあります。デカルトの方法序説、梅原猛さんは、私もデカルトと同じ方法でやったんだって書いてあるんですよ。それは、さっき梅原賢一郎さんもおっしゃったけど、世界を疑ってみる、とことん疑ってみる。だけど、その後に直観なんですよ。直観というもので世界を見つめ直してみると、気づきがある。

そしてその気づきが、この世界をきちんと理解するのにいかに重要なものかということ、エビデンスを探して、何度も繰り返し繰り返しその正当性を確かめる、真理を見極めるってことが必要で、それをやった。だけど、結果として梅原猛さんは、デカルトは間違っていると結論づけたわけです。というのは、これは奥野さんもおっしゃってたけど、精神と肉体を分けたことです。「コギト・エルゴ・スム (Cogito, ergo sum)」 「我思う、ゆえに我あり」。要するに身体を他の環境と同じ物質世界にして、これは物理学の法則に従うものだということで科学革命を作った。その後起こったことはすべてデカルトの予言通りなんです。

でもね、僕の師匠のそのまた師匠の今西錦司っていう人がいるんですね。この人は1902年生まれですから、梅原さんよりずっと先に生まれています。デカルトなんて全然言及してないんですが、同じことをやってるんです。「疑う」ってことをね。

まず疑ったのは、生物学って本当に生物を研究しているんだろうか。みんな標本にして、死体にして、それを解剖して、要素に分けて、部品ごとの機能を調べてやってるだけじゃないかと。俺はもう死物学はやらん。生物学をやろうというんで、動いている生物を一生懸命観察してその実態を探ろうとした。これが、まず今西さんがやったことです。

そこで気づきがあったんです。「棲み分け」という現象を発見したのも、今西さんの動いている生物を見た結果なんですね。

次に疑ったのがダーウィンの進化論なんです。ダーウィンはもちろん今西さんと同じところから出発しているわけです。なぜこの世界はこれほど多様な生物がいるのか、なぜこれほど形質が違うのか。それは歴史というものの中でその多様な形質が生まれたに違いない。じゃあ、どうやって生まれたのか。その解釈が今西さんとダーウィンは違うんです。

今西さんの有名な言葉があります。

「この世の生物も非生物も、元はひとつのものから生まれ、分化してきたものだから、それは調和する性質を持っているはずだ」

これは今西さんの直観なんです。これがダーウィンと違うところなんですね。

今西さんはその直観に従ってさまざまな植物も見だし、動物もいろんな昆虫から哺乳類、サルまでずっと見てきたんだけど、その直観を失うことはありませんでした。

だけど、梅原猛さんと同じように、エビデンスを完全に示すことができなかったんですね。だから、その頃流行ってきた社会生物学とか生命科学の人たちに馬鹿にされ、無視され、脇に追いやられ、いまだにそれは生物学の世界では信用されていません。

それはわかるんです。でもね、その直観はとても大切なことだと思うんです。なぜならば、人間がこれから生きる上で大切なんですよ。それがすごく今日、日下部さんの解説によって分かりました。「あ、そうなんだ」って思っている。でもその直観をずっと信じ続けるということも大

切なんだけど、それをいろんな立場から解釈し、この世を作り変えていくことがもっと大切なことなんですよね。

小麦文明と米文明の違い

梅原さんは、文明比較をしているんです。西洋文明と東洋文明の違いは一体何か。今日、梅原賢一郎さんがちょっと言いかけたことですが、小麦文明と米文明の違いだってことを喝破されています。

西洋文明は怒りの文明、戦いの文明なんだと。それは小麦を作り、そして家畜の力によってそれを穀物として税金として納め、その生産をする労働力を奴隷として扱ってきた。これはジェームズ・スコットが『反穀物の人類史』という本の中で喝破してるんです。彼はメソポタミヤ文明を調べている歴史学者なんですけどね。

スコットの歴史の解釈はこれまでとはちょっと違います。農耕文明から一気に都市文明に至ったわけではなくて、狩猟採集と農耕の間に大きな葛藤があって人人々は4千年間も二つの生業様式の間を行ったり来たりしていた。それが穀物を作ることによって、家畜をつくることによって農耕文明へと移行した。でもその選択はひょっとしたら間違っていたかもしれない。現在でも都市文明や農耕文明から逃れて狩猟採集を行っている民族がいます。その暮らしの本質をもう一度見習うべきではないかと人類学者は言っているし、奥野さんもそのひとりだと思うんです。

一方、米の文明というのは世界の四大文明の陰に隠れていると梅原猛さんは述べています。先ほどエジプト文明はもともと米の文明だという話がありましたが、あの文明が栄えたのは小麦です。梅原猛さんが喝破しているのは、エジプトもメソポタミアもインダスも黄河もすべて小麦の文明だった。しかし、それらの文明は森を全部伐採してしまった。

梅原猛さんが中国の北部に行ったら驚いたのは、森がない。もともと森があったはずなのに、森がない。しかし、その南に行くと、森が残っていた形跡があるんです。長江文明が栄えたところです。これは米の文明だった。その米の文明を作った人たちが、黄河文明の人たちが南下してきて滅ぼされ、その人たちが日本に渡ってきて米の文明を作った。これが弥生だというわけです。そこから縄文と弥生との融合が始まるわけですが、でも米の文明は森を伐採しなかった。だから日本列島には今でも67パーセントの森林が残っている。

もちろんこれは脊梁山脈が日本列島の中心部をなしていて、なかなか森林を伐採できなかった。しかも牧場にできなかったってことがあるのかもしれないけど、でもそれは米の文明のおかげなんだという考え方もあるわけです。

米はいつも清涼な水が水田に流れていないといけないので、事実、東南アジア、アジアで米を作っている所では森が残っています。そういうことをもう一度、生産現場から見直していかなくてはならない。これは梅原猛さんの信条だと思います。まず足を運んで現場を見て、長谷川さんがおっしゃったように、行動する哲学者なんです。そして歴史という、いまわれわれが学んできた道筋をもういっぺん紐解いて、改めていろんな角度から問い直してみるということを始めた。それは今西の門下であるわれわれがやってきたことでもあります。

新たな未来を構想する時代が来ている

もう一度、人類の歴史を解体して組み直してみなければならないのではないかと。われわれは無文字時代の、あるいは言葉以前の人類の歴史を問い直すということをやっているわけですが、それは現代の緊急の課題である、痛切に感じています。それは人間性を問い直すことでもあるし、社会性を問い直すことでもある。

どうして人間はこの社会を作ったのか。どこかで間違ってたかったか。もっと違う方向があったのではないかと。歴史を肯定するのではなくて、進化をそのまま肯定するのではなく、それぞれの時代に立ち戻って、その状況を心の中に描くことによって、新たな未来を構想する時代に来ているんじゃないか。そう思えるので、この梅原猛人類哲学賞は非常に大きな節目になるのではないかと期待しているところでございます。

◎討論

小西

山極先生、どうもありがとうございました。

それぞれの先生方のお話をまだまだ聞き続けたいというのが正直なところで、実はこれからさらに議論を深める時間を取ってあるんですが、ただ時間が限られておりますので、どうしようかと考えていたところです。この座談会はコメンテーターを置いておりませんので、僭越ながら私から問いかけをさせていただき、それに対して応答いただくという形でお願いできればと思います。

今日のフォーラムは「梅原猛を継ぐ」ということでございますので「継ぐ」というところにしぼって問いかけをしたいと思います。

先ほど日下部先生が講演の中で、現代から哲学が消えてしまうんじゃないかということに対する強い危惧を表明されていらっしゃいました。

私はいま40代で、今日お話しされたしんめいさんは30代です。私は人類学者としては今西錦司のひ孫弟子にあたり、梅原猛先生の孫世代にあたります。私もしんめいさんもいま子育てをしておりますけれども、子どもに触れると、いま私たちが住んでいるこの世界を未来にどうやってつなげていけばいいんだって思いに本当に強くとらわれる。そういう営みに対して人類哲学はいかに貢献できるのか。特にそれを継ぐという意味で、まさにターゲットにしたいのが、これから学問を志すであろう人たちです。10代や20代の、私たちよりもさらに若い世代、そういう人たちが、人類哲学賞に大きな魅力を感じて、これを目指すような研究をしたい、学問をしたいと思えるような、何かメッセージや呼びかけというのをさせていただきたいと思うんです。どなたでもよろしいんですけれども、お願いできればと思います。

見えないものこそ重要

山極

僭越ですけれども、先ほど「ピュシス」という言葉が日下部さんの話のなかに出てきました。これは福岡さんの話のなかにも出てきたんだけど、ヘラクレイトスは、自然は隠れるものを好むっていうメッセージを残しました。例えば社会って目に見えないですよ。隠されているものがあるんですよ。その隠されているものをあばくのが哲学です。でも、その哲学は今、目に見えるものによって脇に追いやられてしまったと思います。

それは20世紀で言えば、20世紀の中盤に生命科学が遺伝子というものを発見して、すべての生物は人間に限らず、遺伝子によるシナリオによって作られている、というふうになってしまった。それまで人間は特別な存在であると言っていた哲学が、そこで立ち止まってしまったわけですね。

そして、遺伝子は4つの塩基でできている。その4つの塩基がどう組み合わせられるかによってシナリオができています。これはもう情報学です。だからいまはもう情報学の時代ですよ。そうになると、どんどんAIが活躍をする。身体を通さずに、いろんな情報の組み合わせによってこの世が作られているのだから、その組み合わせの法則さえ知ればこの世はわかる。あるいはこの世は作り変えられるという信念がどんどん広がっていくわけです。

見えないものを見るのではなくて、見えるものからこの世を作り変えていこうという言説が広がり始めている。でも、やっぱり見えないものこそが重要なんじゃないかと思うんですよ。そこをどう解釈していくのかというのが、問われている。そこに梅原猛さんはずっと挑戦してきたと思うんです。そこをわれわれは忘れてはいけないのではないのかなと思います。

僕は鷺田さんにぜひ訊いてみたいんだけど、鷺田さんと僕は、昔、対談して『都市と野生の思考』（集英社インターナショナル新書）という本を出したんです。でもさっき鷺田さんは野生の思考が重要だって言ったじゃないですか。あのとき、鷺田さんが言ったのは都市の思考なんだよね。なぜ野生の思考が重要なのか。

誰も見ていないものを見るようにする

鷺田

昔、僕が哲学の勉強を始めた頃、詩人の文章で、「あ、これが哲学の定義だ」と思ったのがある。長田弘さんという詩人が『アウシュビッツへの旅』という本のなかでこんなふうに書いていた。「みえてはいるが誰れもみていないものを見るようにするのが、詩だ」。

見えているのに、誰も見ていないものを見るようにするというのは、見えているのに見えないというのは人間の限界でもあると同時に、社会的にも見えなくさせられている。だから、その見えなくさせられている仕組みをちゃんと見て取らないといけない。そういう意味では、哲学と社会科学っていうのは根底で繋がっています。どういう文脈だったかよく覚えていませんが、その社会科学的な思考を「都市の思考」と言ったのかもしれない。

一方、野生ということについて言うと、今日、日下部先生のお話で、梅原さんが若い頃に「発情期」（思考の発情期、想像の発情期でしたか）を迎えられたとおっしゃったときに、「知性が発情する」ってすごく含蓄のある言い方だと思いました。

私は梅原さんの人類哲学を考えると、もうひとつ、今日の話ではあまり出てこなかったけ

ど、人間にとっての感情のもつ意味について、鋭敏な思考を展開されたと思っています。心を震わすとか言いますが、人間を本当のところで動かしているのは感情であって、感情に着目するってどういうことかという、感情にはエモーションとか、センチメントとかいろんな言い方がありますが、その中の一つ、パッション——情念とか情動ですね——は、もともとパッシブ、受け身っていう意味がある。

パッションというのは、環境から、自然から、働きかけを受けたということ、つまりその受け容れるっていうことが、感情として発生するんですね。そういう意味で、感情の問題を考えると、梅原さんのいう人類哲学ですね、この二つは深く繋がっていると思います。

山極

奥野さんはマルチスピーシーズということをしつと主張されているから、こういう話に何か意見あるんじゃないかな。

二項分断が社会に深く入り込んでいる

奥野

「野生の思考」に戻りますと、それは、いわゆるパッションやパッシブの話ともつながるんですけども、例えばレヴィ＝ストロースが『悲しき熱帯』で出してくる事例で、ブラジルの先住民ナンビクワラの人たちが、幼い頃から、ある関係の男女、つまり「交叉いところ」どうしの男女が、男は女に対して「妻」、女は男に対しては「夫」、つまり夫と妻と呼び合う習慣があったことを紹介しています。そういうやり方を誰かが始めたのではなくて、すでにあるものとして、人々の暮らしの中に隠されている秩序のことを、レヴィ＝ストロースは、「構造」と呼んでいます。そういった「構造」の発見が、後に、人類に普遍的に見られる知的操作の様式としての「野生の思考」につながっていきます。

そういう形で私たち人類は、生まれてから受け取ったものを無意識のうちに用いながら暮らしてきたということなのだと思います。私自身が長らくフィールドワークをしてきている狩猟採集民の社会でもそうです。人類文明ということを考えるときには、まずは、「野生の思考」を持ち出して探っていくことが大事であるわけですね。

マルチスピーシーズからはズレてしまいますが、私は「狩猟採集という生き方」、つまり持続可能だった「産業基盤」を可能にした人類の暮らしに、とても関心があります。それはいま言ったことにも通じるんですが、プナンというボルネオ島の狩猟採集民のフィールドワークをやり始めてからずっと継続的にやっていて、今年がちょうど20年目なんですが、毎年2回行くと、新たな「発見」があるんですが、ちょっとだけその話をさせてください。

20年来付き合ってる高齢の狩猟採集民のプナンの男性が、足の状態が悪く、最近になって歩けなくなったにもかかわらず、負ぶってもらって、森の中の狩猟キャンプについて来たんですね。ずーっと狩猟キャンプに留まって、ただずっと座ってるだけだったんです。

で、他の人たちが一生懸命働いて、狩猟小屋を作ってくれたんですが、ある男性が森の中に木を切り出しに行って、木材を運んで、汗だくで帰ってきたときに、目の前にいた私に対して、「喉が渴いた。水をくれ！」って言ったんです。

で、私はペットボトルを持っていたんで、彼に渡したんですが、彼が飲もうとしたその瞬間に、目の前に歩けなくなってただ座り続けている男性がいることに改めて気づいて、飲む前にその水を、「飲むか？」って、まずは聞いたんです。彼は歩けない、動くことができない。それを氣遣ったんですね。歩けない男性はひと言「欲しい」と言った。それで、水を分け与えたシーンをそのとき目の当たりにしました。喉が渴いて帰ってきた男性は、このことをとても自然な形でやったんです。

自分の喉の渴き、あるいは自分の痛みよりも先んじて、自分の周囲にいる人に対するケアを自然に繰り出すことができるような振る舞いが、そこにはあった。これは、「狩猟採集の生き方」の根本にあるものではないかということ、そのとき確信したんです。つまり、私たち人類はこれまでほとんどの時代において共同制の中で暮らしてきたし、狩猟採集の文化を見るというのは、そういうふうに、観察したことを考察することを繰り返していくことなんじゃないかということです。この事例から分かることは、自他の境界がないということなんです。

私たちは自他というふうなものを明確な形で切り分けて、分節化しています。私は私、あなたはあなた。彼は彼。あたりまえです。主客と言ってもいいです、あるいは自然と人間というふうに言うてもいいですけども、そういった二項の分節化、分断というふうなものが、私たちの社会の中に深く浸透している。

そのあたりのことを考えるときに、梅原猛が言っていることが、とってもよくわかるんです。イデア論以降に西洋哲学が奮闘して作り上げてきた考えが、つまり物事を人間中心主義的に、「われ」を中心に置いて、世界を明確に切り分けて考える態度が、私たちの思考の中に深く入り込んでいる。そして、私たちはいろんなところで、そのことの恩恵を浴びている。でも、何か間違ったところもある。その間違いについて、深く考える必要があるんだと、梅原は言っているのです。

そこで人類哲学という言葉を作ったんだけど、その内実を1つ1つ埋めていくことは、自分独りではできなかった。だからそれを引き継いだ形でやってほしいということを梅原は言っているのではないかなと思うんですね。

先ほど長谷川先生からインゴルドの話が出ました。インゴルドは、最近「人間中心主義」で行くってのは、どうしようにもできないんだ、ということを言ってます。ただ、「in the proper sense」というような言葉を後につけて、つまり「適切な意味における人間中心主義」というのが必要なんだという言い方をしています。

一見すると人間中心主義を取り戻すべきだと言っているように思えるんですが、実は西洋における、近代文明が持っている人間中心主義ではなくて、先住民たちが持っている人間中心主義に帰すべきだとインゴルドは言っているんです。いろいろキーワードがありますが、例えばそれは、動物と植物、それから鉱物も含めて、生きとし生けるものすべてに生命があるというふうにならわれは考えてきたということを含む、人間中心主義なんです。ようやく、ここで「マルチスピーシーズ」に繋がりがかけていますが、長く話しすぎているので、後は簡略に。

「山川草木悉皆成仏」という自然な考えを抑圧しているわれわれが、その抑圧を振り返って、自然の中の間がどうあるべきかを考え抜いていくことは、人類哲学の柱のひとつになるのではないかなと考えております。以上です。

小西

ありがとうございます。長谷川先生、福岡先生からも一言ずついただければと思います。

新しい視点や想像力を担う哲学と芸術

長谷川

10年ぐらい前からなぜか「いま芸術と哲学は何の役に立つんですか？」という質問をたくさん受けてきています。どうして芸術と哲学をいっしょにするのかなと思いながら、私なりに答えを考えてきました。

人間というのは不思議なもので、人は自分はどうして生まれてきたのか、なぜ生きているんだろうという、という質問をします。それを問うのは人間だけだと思うのですが、それに対して人間は最初神様を発明する、宗教をつくることで、答えをひとつ出しました。

次は「時空間ってどうなっているんだろう」という問いに、アインシュタインが答えを出してくれました。

次なる「生命はどうなっているんだろう」という問いには、ワトソン（ジェームズ・）、クリック（フランシス・）が出てきて、生命の、秘密を解いてくれた。あと残っているものは、この私たちの心と頭の部分だけなんですね。それは脳の機能を解明すればいいという話ではなくて、認識や知覚を超えた、つまり、感情とか、私たちの想像力とか、先ほどの、目の前にないものを見る力ですね。それを担っているのが芸術と哲学なのでこの最後に残された領域としてとても重要です、と私は問う人々に答えてきました。

芸術と哲学の共通点は、世界をどう見るのか、どう語り、表現するのかということで、そこには今までにないオルタナティブな見方の可能性が多く含まれています。

芸術家は、いまここにはないもの、オルタナティブな別の考え方、世界を新しい視点で見たり、想像力に満ちているわけですね。それを視覚をはじめとして、みなさんが可感化できるようなフォームを与え、共有できるようにする。

おそらく哲学者もそれが言葉であったり、行動する梅原先生のようなさまざまな形でそれを形にしていく。私たちの世界を見るビジョンというものは何であるか、そしてそれを形にすること、が非常に重要になってきているということを感じます。特にAIは、LLMなど過去の巨大な情報を網羅しています。でも、それはすべて過去なのですね。新しいことはそこから出てこない。それを担うのはやはり芸術と哲学、その他の諸研究であって、ここにいらっしゃる先生たちすべてが関わっていらっしゃるようになるかと思います。

そういうふうなイメージを今日、みなさんと共有したいと思います。

小西

ありがとうございます。福岡先生、お願いします。

ピュシスに触れる

福岡

来週またノーベル賞の季節が巡ってくるんですけども、日本では高市さんが自民党の総裁になったそうで、ノーベル平和賞がトランプに行くかもしれないぐらいのすごい時代になったんですけども。

去年のノーベル賞は、AIの研究者と、化学賞はAIを使ってタンパク質の構造を予言する人たちになって、近代科学は本当にどんどんどんどんロゴス化されて、ロゴス中心がもう極まりつつある時代に来ているんですね。今年のノーベル賞もおそらくその方向に行くと思います。

でも、今日みなさんといろいろお話しして私が感じたのは、梅原猛はやっぱり今西錦司、西田幾多郎という京都学派の系譜のなかに位置している人だなというふうに思ったんです。それはロゴスに対抗する自然観はピュシスを見るということですね。本来のピュシスはヘラクレイトスが言っているように、隠れることを好む、あるいは「パンタレイ」、万物は流れるものとして、常に手渡されるものとして、自然や命はあるけれども、それを止めて分解して分析していくと、ロゴスの的に世界を捉えることになる。しかしそうすると、見えなくなってしまうもの、見失ってしまうものがある。

ですから、例えば世界が棲み分けているっていうのも、ダーウィニズム的なロゴスによって見ると、それは闘争の結果、そのように最適化されたっていうふうに解釈できるんですけども、今西錦司は、いや、そうじゃなくて、最初からそういうものは生物が選び取って棲み分けているんだというふうに見るわけですよ。それは彼の直観で、そこには論証がないから、今西錦司はノーベル賞を取れないんですけども、でもたぶんその考え方のほうが正しいんですよ。

だから、次世代の子どもたちにぜひ伝えたいのは、携帯やコンピュータから得られるロゴスの情報だけで世界が成り立っているのではなくて、ピュシスのあり方を行為的な直観として感得するっていうことがとても大事なことになる。

そして梅原猛も直観として、世界の成り立ち、あるいは歴史のあり方、日本人の古層にあるものに近づいていったわけですよ。そういったものがやはり取り戻されていかなければいけないと、つまり「ピュシスに触れる」ということになるんじゃないかなというふうに思います。

小西

ありがとうございました。それではここで締めたいと思います。

今日の議論を聞いて、先ほど鷺田先生がおっしゃったように、すべてがすぐにわかるわけじゃないし、正直よくわからん部分もあるけど、なにかすごいものの見方があるんだ、という印象

が、いまお越しのみなさま、そして画面の向こうにもいらっしゃる、これから学問を志すみなさまにも伝われば、このフォーラムは大成功だったのではないかと思います。そして人類哲学の深みや広がり、未来に向けた可能性も改めて確認できたと思います。ほんとうにみなさま、どうもありがとうございました。それではこれで座談会を終わりたいと思います。

司会

ありがとうございました。もう一度みなさん、先生方に拍手をお願いいたします。